

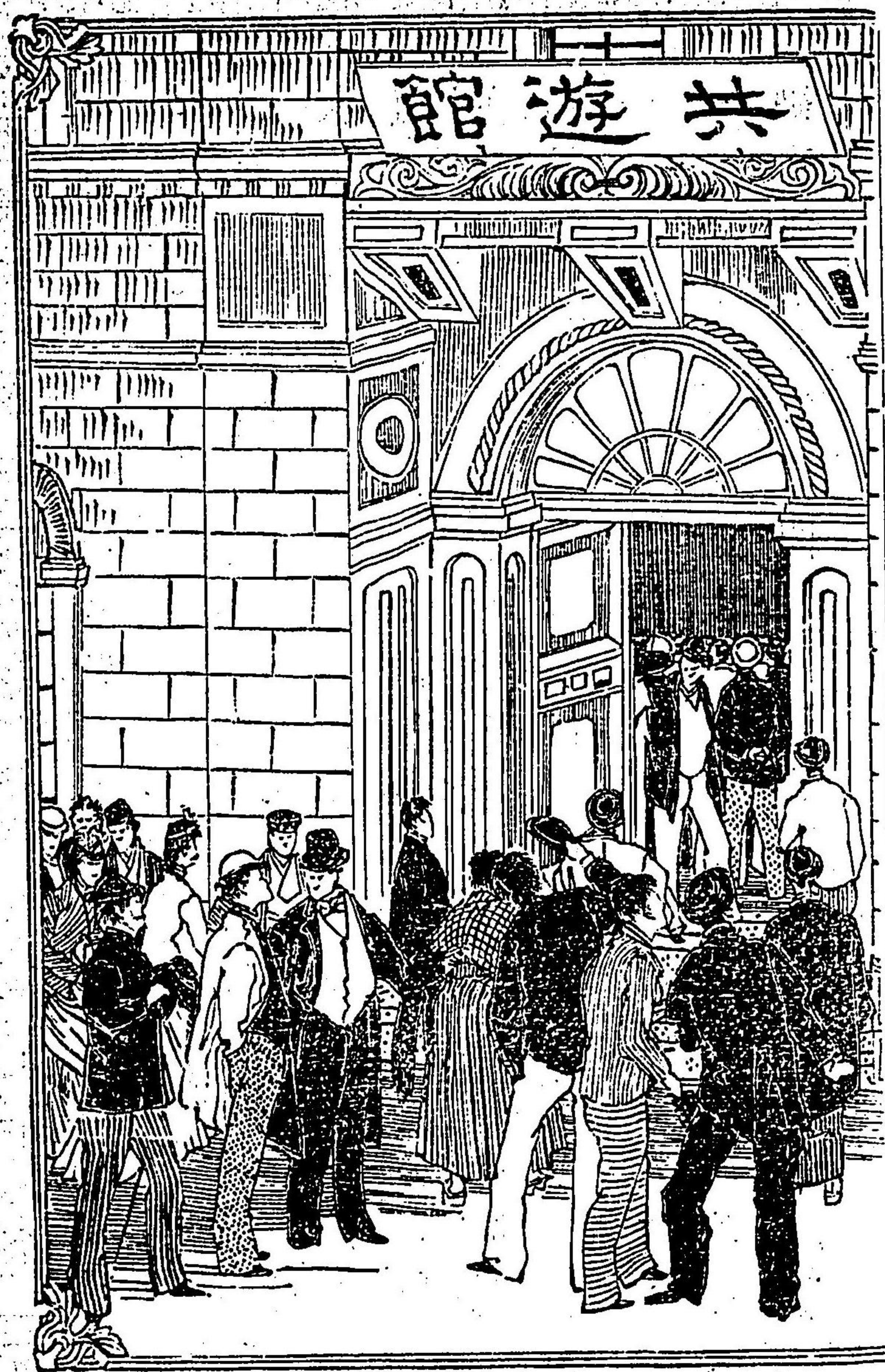


拍手 續滑稽獨演說發兌の趣旨
 諸君よ拙者めハ斯見えても大日本帝國の大都會東京府下京橋區銀座二丁目六番地稗史小説出版元共隆社の厄介者何尾勇藏と申して平生の誠の横着な治郎で御坐います其平生の横着者ハ不似合ながら兩手を小笠原流ハ突き脊骨ハ眞影流ハ屈めランプ頭を振立世界萬國の御客様方ハ御禮と御吹聴を合併してエ、エ、恐れを遣つて申上奉つるハ外の儀で御坐います

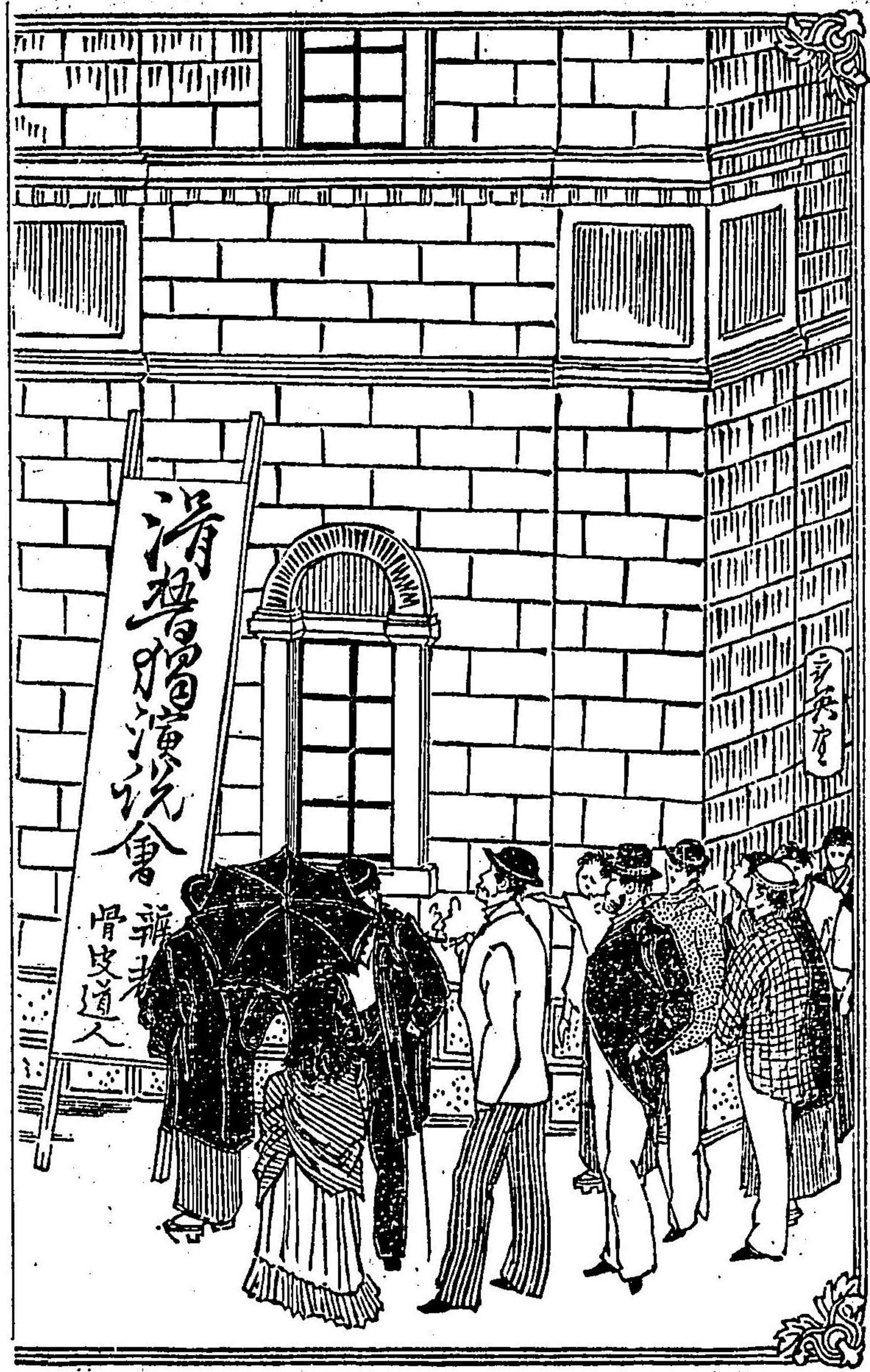


せん弊社儀囊は滑稽獨演説と題する大看板を
 掛て骨皮道人のお饒舌りを御聞きデハナイ御
 覽よ入れまいたる處運の天あり牡丹餅の棚
 と此事で御坐いませう殊の外は御客様方の
 御意は適ひ東邊り西隅までヒヤヒヤ
 と拍手大喝采の聲の天地を動り如何は張飛
 が胴魔聲を張上げて十萬の魏軍を威怖したか
 らッて此演説の大喝采ヒヤヒヤの聲は腎邊
 の毛も追附まいと思ふ程御賛成人が多随
 ツて傍聴料の収入も算盤珠は當ると質々始終

苦の資本を引て思娛荷重のころと云ふ帳合で
 御坐いまして(ヒヤ)ナット諸君よお愚弄の
 御無用ですエヘン底でペラヒ饒舌繰た骨皮
 道人の横ツ廣ガりのピシヤンコ鼻を無理は接
 足してピコ附せ私立銀行の願ひ書は何様は書
 たら餘勘平ナインぞと毎日浮言ばかり云
 ツて居りますすが何は致せ社員一同も蹇勝五郎
 が足の立たる如く天を拜し地を拜し蜻蜒返り
 有頂天の大喜悦で赤飯を下物お麥酒を飲むと
 云ふ素敵滅法界の大仕合は是れ全く御客様方



五



四

八
 で最一席の喝采を得なければ社会の風潮も後
 れる社会の風潮も後れての翠玉を持て居る功
 能があいと云ふ了簡たり何たり今度の前篇よ
 りう一層汗を流し震ひ聲を出し兩肌脱の大勉
 強で真味おお饒舌を致します左様で御坐いま
 すりら何卒前席同様御聞取御賛成の程一重
 は二重御願ひ申しア一け奉つり升と社員一
 同の惣代とあつて長口上書の如し弊社用から

明治廿年第十月

共隆社の厄介小僧何尾勇藏頓首敬白

拍手喝采 續滑稽獨演説目録

- 書物の何の爲めお讀む歟
- 話し半分は聞け
- 店賃の改正を望む
- 專賣品の直段は附て老人の話しお感ず
- 少年の風流お安んせ可りらせ
- 奉公人の使ひ方
- 奉公人の心得
- 看板の別り易く書くべし

- 腹の中の笠を脱ぐべし
- 先生々々
- 媒の人の必要を論じ併せて其の改正を望む
- 改良の改良を爲さる可からせ
- 癖の説
- 野暮が宜いり意気が宜いり
- 蒼天の高さと人間の慾の測量が出来ぬか
- 車夫さんよ忠告を
- 儘よなる工夫を

- 眞似するも事よよる
- 程よき説
- 自惚の説
- 思ひの説
- 迷ふ可からず
- 茶代を廢すべき説
- 隣の糠味を憎む
- 成るべく方言を去るべし
- 仕合せとて安心すべからせ

- 浮世の回り燈籠の如く
- 圍碁の流行の泰平の餘裕ある歟
- 僥倖の説
- 藝娼妓を改革すべき説
- 人を見て法を説け
- アキラメる説
- 我頭の蠅を逐へ
- 舊慣を棄て兒童を教育せよ

通計三十四題

拍手續滑稽獨演説

瘦々亭骨皮道人演説

和良井鋤太筆記



特61

905

○書物の何の爲に讀む歟
 今道人が突然又斯様な變挺來の演題を提出しますれば諸君の必ず奥齒で
 嘖のて新申されませう骨皮道人の氣でも違ひのせぬか此奴
 には爲らうと思つて書物を讀み齷齪勉強する者のない書物を讀み學問をす
 るの何の爲にするか位の如何は漂碌玉汚短珍の骨皮道人でも此位を理屈
 の知つて居りさうなものだ然るに茲に麗々しく耻敷もない眞面目で之を
 擔ぎ出すといイヤハヤおどろき桃の木山椒の木だト道人曰く如何様その

お冷笑の御尤も千万で御坐います去りながら道人も少しく否大變な腦味
 増の不足して居る人間即ち出來合の男で御坐いますのら迎も人並の理屈
 の申し難き事の諸君も素より御存じあり斯く申す誤當人も承知いたし居
 り升なども如何に季候が不順で有りまして未だ瘋癲病院の御厄介の
 相成らぬ積りと自分丈で取極て居る次第で御坐いますうら兎に角に何様
 奇熱を吹の一寸マア御目數様ながら御手數様の變體御覽の上でナール程
 と御感心下さるともイヤハヤとお冷笑さされるとも其處の諸君の御隨意
 お心任せと致しまして兎まれ角まれソイツと蓋を明て見ませうの(謹聴)
 エヘン書物にも種々あり學問にも色々御坐いますから一概に是が斯と一
 握み申し上ます譯の參りませず又悉く書を信すれば書さきも若す
 と申しまして何でも書物にの虚言のない法螺の吹ておいと確く信する事
 の出來ません若し書物とさへ云へば虚言の無いもの法螺の吹て無いもの
 と確く信じました日にやア夫こそ大變な大間違ひが出來するも違ひあり

ません(ヒヤ)あれども昔しの論語讀みの論語をらす杯と云ふ戒めも有
 りまして書物もある事の成べく其事を我身も實行するを以て學者だとう
 先生だとの崇める有様で御坐います例へば迅雷烈風の時に天道様に
 叱られると何と云ふので急お麻上下を着用して坐敷の真中お恐れ入
 慎んで居るとか或のまた君子の固より窮すとう云ふ小入釜しひ一件で貧
 乏で暮すのを却つて外見として居て家の内で傘をさして書物を讀むと云
 ふ様お先生も有つたとの話して御坐います當節の此屁痴辛い世れ中を
 渡るよ其様お手ぬるい氣樂お事の中々三度の飯が喰へません(ヒヤヒ
 ヤ)去りて書物も書き載てあることおんでも皆虚言ツぱちだから
 自己の自己の了簡で遣て見せると威張つて見た處が他人が話し相手は仕
 て呉ませんければ是も面白くおい獨立で御坐いますして誠と詰らおい譯柄
 で御坐います否皆詰らおいばかりで無く書物を讀みませんければ智惠
 袋の目方が輕い之を素派拔と申せば馬鹿とあり間拔とあります(ヒヤ)

ソコテ以て先づ虚言と信と云ふ論の暫くおき歴史を讀で古今の成敗から
 時世の變遷を知り又ナポレオンの斯様を英雄で有つたとかコロンブスの
 斯様を事を仕たとの諸葛孔明の斯の如き人であつた羽柴筑前の守秀吉の
 何云ふ人と爲であつたとの彌次郎兵衛喜多八の何をえた花川戸の助六が
 斯した(ナット是の餘計でした)と云ふ事まで曉り又窮理書を讀んで雷の太
 鼓を叩くのでい無い(ヒヤ)地震の鹿嶋様の仕業でいあい(ヒヤ)瓢箪
 のら駒が出るのと云ふのい虚言だ灰吹から蛇が出るのと云ふのも當にあらぬ
 と云ふ筋道を知り(ヒヤ)其やか經書よまれ法律よまれ經濟よまれ哲學
 にまれ醫學にまれ難でも艱でも夫々その書を讀んで其譯柄を曉りこれを
 腦髓よ浸込してそれから腦髓の働さで虚言と信とを撰分け其虚言の方を
 屁消にして信と想ふ所の正味を殘し其のこしたる信の事を旨く調合して
 初めて書物を讀んだ功能が顯はれ人間の智識と云ふものが出来るものが
 御座いませう(ヒヤ)夫れ然り然るお世間多くの人の中でい書物を讀ん

で利功に爲らうと思つて却つて書物に讀まれて仕舞人が御座います(謹聽
 謹聽)扱書物よ讀まれるとい如何ある調子合ふと申しますれば例へば彼の
 酒を飲ずして酒に飲れると云ふと同じ事で御座いまして恰も葡萄酒を養
 生よ飲用せんとして却つて葡萄酒よ酔拂ひグデンと爲て乱暴を働く
 と一般の結果を顯はす人が御座います(ヒヤ)諸君よ是をら論題の骨
 子で御座いますのら宜く聞て下さい彼の葡萄酒も養生よ飲用するおれば
 賊に結構を酒で御座いませうけれども之を飲んでグデンと爲り乱暴
 を働いてい折角の銘酒も却つて害とあり寧ろ飯ん方が宜ろしいのでい御座
 いませんか(ヒヤ)書物を讀むのも之と同じ道理で書物の元來智惠袋を
 重くして利功よあるべき道具あるに書物を讀んだが爲めに半端の人間が
 出來てい實に困つたもので半端の人間にある位おらば寧ろ書物を讀まお
 い方が宜ろしいのでい御座いませんか(ノウ)諸君よ諸君のノウ
 ノウと仰しやるが書物よ讀まれる者の世間よ幾許も御座います例へば我

生家よの幾分かの財産もありて其土地も實直おして居れば可なり立派な身分で近所近邊の人々の皆且那樣くと崇め屈突張り身分の此人々の風上よ立て恩で挨拶として宜極上等の身分ある書物も讀まれたが爲よ大切な財産を棒振り川柳子の所謂賣家を唐様でかく三代目と云ふ一件の遠くも通り過て今日でい處々方々の知己を便つて居ゆを拜命する如き可憐はかき有様も立至る者も御座います(ヒヤ)ノウ)或ひの男子志しを立んと云ふ意氣込みで國許をノマツリ出したの宜けれど勉強するふの學資の脈がされ月給取にの迎も爲れず底で止を得ず僅かに我記臆せし書物の文句を筆の先を特んで小賣を初め藝が身を助けるほどの不仕合せと云ふ様も骨皮道人其人の如き者も御座います(ヒヤ)夫れ書物と云ふもの前申しました通り人間を利功とする道具で御座いますから斯の如き馬鹿く敷こと毛頭おい等で御座います其おい等のものが有のガ即ち書物も讀まれた証據で御座います其書物も讀まれる原因の何よ

り起るか考へて見ると矢張り書物も書載てある事柄を悉く信じて法螺も虚言も一握みよして早呑込も呑込ひより初まるので一寸其例を擧て見ますれば何々の書も英雄色を好むとあるから英雄もあるよ第一女郎買を仕さければ往ぬとか妙さ處も手前勝手の註釋を加へ人これを忠告すれば燕雀おんぞ鴻鵠の志しを知らんとか君子の細瑾を顧みずとか難の艱のとオツに手前味噌を調合して英雄にあらざるは英雄を氣取ること恰も回向院の相撲を見て自ら關取を氣取り肩を怒らし大股も歩行く如きの振舞を爲す是れ即ち書物に讀まれたので御座いませんか(ヒヤ)處で道人の諸君も御注意を願ひ度外の事でも御座いません諸君が書物をお讀み成されるに誠に此上もあい結構なことで御座いませすが何書も限らず書物を御覽の上の宜く虚言と信とを嚙分て虚言を屁消にし信を殘し彼の回向院の相撲を見て自ら大關を氣取るが如き振舞を爲さず書物も讀まれぬ様注意して成べく智慧袋を重くする事をのみ願ひ奉ります(大喝采)

○話と半分は聞け

諺は話し半分は聞けと云ふことが御坐います。此諺より考へて見ますと昔の人の正直だと云ふの虚言で昔の人だからと申しても矢張り虚言もつき法螺も吹き戯談も言ひ人を欺す事も有つたに相違御坐いません併し昔の昔しとして置いて此諺を今の世も持出しても實に適當かと思ひ猶この諺の古人我を欺むかざる金言うと存じます(ヒヤ)扱かに故この諺を金言と相場を附た欺と申しますると是の所謂因縁をお話し致しませんければ分りませんが道人の只今の處で然も東京府平民でナンドーペランメーの一人で御坐いますれども其元を尋ねますと矢張りナシウコンダと云ふ田舎ッ平で御坐います(ヒヤ)その田舎ッ平の骨皮道人がまだチツボケを餓鬼で御坐いまして大學朱熹章句子程子の曰くとか山高きが故に貴とからず樹あるを以て貴としとすとか何とか鼻汁を垂して阿魔牌で遣加して居りました頃は今を去ること即ち廿年以前の事

まだ金紋先箱とか何と云ふ飛鳥も落る落おければ無理でも威張り落すと云ふ威勢堂々意氣赫々で下はオロロ無禮すると首根ッ固をナシ切るぞと恐嚇された舊幕府の模様は是のまた問題が別にありますから此位で置まして其後王政維新明治の御代とあり江戸を東京と改稱せられました頃ハイヤモリ東京とさへ云へば皆金銀で家屋が出来て居る様に想像し又乞食でも銀行を建て居る様に想つて居るのみならず其評判の大變で御坐いました而して其頃はまだ新聞紙のシの字もあし雑誌のザの字も無かつた時分です。素より想像するばかりで東京の風俗人情と云ふもの少しも知る事が出来ませんでした。謹聴く故に唯東京の有様を目標した人お就て大都會の様子を尋ね其話を聞の外のありませんでした。が其目撃し東京を丸呑にしたと云ふ人の話を聞くに曰く東京の博識多才の人をかりで我生國にウヨウヨする様も馬鹿者や三太郎の薬に仕度も一人もあいな負に豪商大家が揃つて居るか我生國もウヨウヨする様も

貧乏人や乞食の鉄の草鞋で三年尋ねても恐らく有るまい夫も八百八町の常盤繁華雜沓して東西南北何處に何處を片隅へ行ても實に立錫の餘地もあらず丸で人間で往來を塞いで居る殊に日本橋の通りあどの終日終夜とも人馬の往來の絶る間が無いから年寄や小供の迎も通行することの出来ぬとか或の芝居の格別また立派なもので大將から申上りの役者まで残らず千兩役者だから何様見ても芝居でないか生物としか思へない夫れは道具立てが全備で居るから我生國の乞食芝居の様を死人を毛氈へ包んで歩行せたり腹切たものが笑ひながら引込ひ様な馬鹿げた事瓜の垢やとも無い東京の芝居での大抵死人を舞臺の下へせり落すとか横へツート引で仕舞ふとか總て手奇麗にするから一ツ狂言を三十日見ても些とも飽きない道人のこの話しを聞いて以爲らくナールやと東京の日本第一等の大都會だから左も有りきん左もさうすべしと感心感服して居ました(ヒヤ)ノウ(然るところ其後道人も所謂雁が立バ鳩が立と云ふ直似と生意氣の了簡を

起しまして止バ宜の親々類の意見も聞かず人間致る處に青山ありとか何と無鉄砲主義を主張して東京へノコ(出掛て参りましたの己も十幾年前の事で御座いますサア東京へ出掛て實際を目撃すると曾て國許で聞き又曾て想ひしと丸でお月様と監ところでないかい寶珠の玉チツト重言と人玉との大違ひで御座いました(ヒヤ)尤も繁華の事流石東京の東京だけで故郷と比較すれば凡そ百層倍も上の繁華でまた豪商大家も随ふん多いが貧乏人も澤山あり乞食もドツサリ居りまして(ヒヤ)處でまた博識多才の人の如何かと申すと是も流石に大都會の大都會だけ有て利功お人が澤山集つて居る様なもの、去りとして馬鹿の種ぎれ阿房の饅頭と云ふ譯でもありませんでした(ヒヤ)是に於てか道人が初めて気がつき眼が醒て見ると疊の物語りの大抵大法螺を吹て吹まくら八反風呂敷でクル(と包まれたと云ふ事が知れました(ヒヤ))夫れ斯の如く實際を見聞すると人の話しを聞くと見るとの間、於て甚し

大間違ひを生ずるの如何ある譯で御座いませうか道人思ふに是の此方の想像心の過ると彼方の話し上手でと妙奇兼合より生ずる儀で御座いませう併し是の日本の事で早く申せば内輪話しだから何でも宜い様ももの是と同じ事で時々我々の膽玉を驚愕仰天せしむる人が御座います丹のまた如何ある話しかと申しますと外國即ち西洋諸國より歸りたる人の話しで御座います(フウ)西洋と云へば何様か近い處でも何千里と云ふ海路を隔て居りますから中々我々の文無しが諸國安脚を極込み膝栗毛と出掛る譯の參らず殊々蟹の横文字新聞も讀ませんうら是も矢張り其國の實際を目撃した人に就て其話しを聞より外は手段の御座いませぬ處で之を目撃した人又就て聞と其人の曰く西洋諸國の何れに到るもその繁華雜沓の云はん方なく日夜とも肩摩腕撃で煉瓦屋の構造の概ね十階あるひの十五階あれば巍峨として天の河を打コ抜き夜は戸毎に數百基の電氣燈を點火るから誰しも日の暮たのに氣も附ず頭の腦天でゴウゴウ迂鳴るの

是れ雷よあらず蒸氣車の過るあり足の爪先でブンブン響るの是れ地震よあらず電信の通するあり杯と丸で阿房宮の賦でも讀む様を素敵滅法界もあの大風呂敷を廣げる人が御座います(ヒヤ)ソコでまだ西洋の實況を知らぬ道人あどのチールやど流石の文明國だけありて左もあるべし如何さま開化國の違つたものだと感服するのするもの、又翻へつて考へて見ると恰も田舎又居て東京の有様を想像し東京の法螺を聞しと同じ場合もあるべしと思はれます何とあれば現在日本に渡航して居る西洋人の彼の國までも就中利功で金もあつて尺度定木とする譯も参りますまいし(ヒヤ)また彼の國の文明を以て自ら威張つて居る位ですあら百般のことが我より幾分か上に居るよの相違なければどもイッテ文明國だ開化國だからと申しても金が天うら降れば無ければ強がち貧乏人があつて乞食の居らぬと云ふ次第もありません(ヒヤ)然るを彼の阿房宮の焼直し話しを信

じて震へこみ赤い鬚とさへ云へば蜀黍の鬚を見ても立派の様と思ふの
 少しく想像心の過るおれは何でも自分が實際を見届けるまでの話し半分
 に聞ておいて何も其様は蜀黍の鬚を見てまでブルブル震へ込むの當り
 ますまい怖いと思へば氣の持様で箒も鬼も見える道理で御坐いますから
 「イヤ〜」また日本人の習慣として外國にもあるか知らねど兎角に
 法螺がまぢりまして一寸申せば眞三法螺七と云ふ様を話し上手のお方が
 ありますれど是の以來お廢止にして戴いて成らう事からイヤ〜成らう
 事から處でいさい是非とも實際の處を正直に法螺と懸直ちしでお話しを
 願ひ度もので御坐います(大喝采)

○店賃の改正を望む

諸君よアお聞く下さい時々の流行と云ふもの妙なものでの御坐いま
 せんか兩三年前すきはち明治十七八年の頃の頻りに金貸商賣が流行まし
 て少しく資産のある者の自分の裏店を塾居で居ても有たけの金を放り出

して利息をとる事を工夫しました小作米を取るより金の利子を取る方が都
 合が宜と云ふ算盤づくで先祖傳來の田地を賣てまで金貸を初めるおと東
 京と田舎とを論せず權兵衛と八兵衛とを問はず無暗矢鱈と獨立の銀行を
 オツ立て彼方にも此方にも小金貸がウヨ〜出来ましたのハッイ此間の
 様と思ひましたが是も濟時の闇魔顔のまだ宜が上口で身代限り下印で踏
 割しと云ふ連類が幅を利かせる有様とありましてうら金貸先生も割は合
 ぬと見えて何時の間にか立消とありました(ヒヤ〜)然る處また此節の貧
 乏人が殖たとの鑑定ですの又の店借が多く成たとの目當ですか其邊の如
 何か存じませんが無暗矢鱈と貸家貸し長屋を建築して家賃を徴收すると
 云ふ一件が流行いたしまして外の國の何ですか知りませんが東京で山
 の手から下町の場末まで此處も彼所も寸地を餘さず貸家が夥多敷かつ立
 て是の疊建具一切つけて家賃が壹圓五十錢で敷金おしの前金取立で御坐
 るとかヤア是の雜作おしならば七十五錢で雜作を附れば壹圓ボツキリで

お貸し申すとか云ふ至極都合のよい仕組での有りながら其割合に借人の少さいのですか何ですか十軒の内先づ七八軒のかしやの札が斜に張付てある斗りで何時まで達ても戸の明ぬとあるを見ますと強がち貧乏人の増加た譯でも御坐ますまい(ヒヤ)然らば何故に戸が明ぬかと申すと早いお話しが借人より普請主の方が多いたとも思はれます併し或人の話しを聞いて見ると是より色々原因がある左様で御坐います(謹聴)ある人が道人に申しますに斯く貸家の多い割合に家賃が安くさい又その上又習慣だとか算盤づくだとかで家主の仲間に妙々内幕相談がありまして例へば甲助の家作の六疊又三疊の二間で八十錢の家賃と觸出しますと乙平が甲助に向つて責て曰く是は怪かる事あるのさ小生の六疊一間でさへ壹圓づゝ取立て居るにお前さんの方で三疊の餘計物がありながら小生の取立より安價ての誠又困却からは是非とも壹圓二十錢位の相場に改正して貰ひ度とか何とか飛でもさい苦情を附られて止を得ずお交際で家賃

を高くする事があるさうで御坐います(ヒヤ)また裏店社會の其日ぐらしに至つて一時に拂ひ難き處うら家賃を日賦で取立ると例へば九十錢の家賃を日賦すれば一日三錢にて相當の筈あるよ之を四錢づゝ取立ると等の事があるさうで御坐います(ヒヤ)今一つの原因は是は此節に至つて初まりし事にて彼の所得税を地主さんが地面へ割附て地代の直上をまたから随つて家作人も家賃の直上をしたと云ふ事で御坐います(ヒヤ)諸君よ諸君の定めし居附地主で入らッしやいませうから是等の如き家賃の如何より御關係のありませうまいが假令諸君の居附地主で御關係の無いよも致せ恐れながら彼の 醍醐天皇でさへ寒夜又御衣を脱せられ賜ひて凍餒の民を思ふと宣ひし例もあれハ諸君も少しく店借社會の情を察せらるべし(ヒヤ)斯く申す骨皮道人も矢張り家主の御手数を煩はし日賦で家賃を濟崩す仲間御坐いますから兎角に家主さんとの反對又立の氣味合が御坐います處で以て手前の活智の無いの先づ棚の隅へ隠して置ま

して一言愚痴を覆さるを得ざる儀が御坐いますト申すの外のことでも御坐らん即ち前申しました或人の物語三ヶ條の一件で御坐います謹聴謹聴さて家主諸君の家主諸君で万事御相談のうへ店賃の徴收規則を御確定なさるの宜ろしけれど八十銭で割に當ると算盤珠に顯はれたものを自分の勝手が悪くからって我繩張中へ引摺込み店子をして血の涙を覆さしむるとの實は嚴敷で御座いませんか(ヒヤ) (ヒヤ) (ヒヤ) 殊にまた九十銭の家賃を四銭ツ、の日賦で取立るときに取も直さず九十銭を貸して三十銭の利息を取ると同じ事よて素敵滅方界は高い利息で實は残酷とも何とも申し様の悪い誤規則で御座いません(ヒヤ) (ヒヤ) (ヒヤ) 併し是等の初め宜く其誤規則を聞き氣に入らねば借金の事ですが少しく否大變は疝氣筋のと思ひますのの彼の所得税の爲に地代をあげ又家賃を上ると云ふの一事で御座います何故かと云ふは是の三年兒にでも解る事で御座いませう元來所得税との自分が儲けた利益の中より出すべき性質のものあるは其所

得税を出す爲に地代をあげ家賃を高くするに至つて何の事アか儲けの自分が丸取にして肝心なる所得税の間接に貧乏人から納める様を以ての實は我々の如き店子の甚だ迷惑千万イヤ迷惑千万どころで無い丸で政府の御趣意お背くで御座いませんか(ヒヤ) (ヒヤ) (ヒヤ) 左れば家主諸君の少しく店子の腹の中も覗きまた少しく昔の江戸ツ子の肌合も立戻つて店賃徴收法の改正ありたらんに斜張附たるかしやの札も追々にとれ我々店子も少しく足を伸して眠ることを得べければ折角は建築せられたる立派な家屋をムザムザ雨晒しに仕て置かるゝよりの何卒この道人が申す様もお願ひ申し度もので御座います(ヒヤ) (ヒヤ) (ヒヤ) 昔しから知らぬこと此文化開明の世の中其様お馬鹿げなお察しの無い家主さん一人半欠もあいの存じますか底がソレ店子の悲しさよ何れも猜忌根性があつて仕方が有ませんから若し万ヶ一前申せし様の事が有つたらば茲に念の爲と云ふ三字を加へて置きますハイ左様あら大喝采

拙者がソ、ツカしい發明者だと云ふのだ元來一ツの器械を發明して
 國益を計らうと志ざす者がその器械の善か悪いか試験もせずまた製
 造の上の何程に發賣すると云ふ目的もなしに唯專賣の特許さへ受れ
 バ夫で宜金が儲かると慾張根性をかりでの實に困るぢやないやが
 これのお前ばりのりでない世間よの斯様を迂濶か人がイッラもある
 さうだが夫れでの國益にもあらず自分も却て損する様事が出来す
 るうらマア能く試験して見てこれで宜と確定たら夫れから特許を願
 して特許もあつたら成べく丈の直段を安く賣て世の人の便利にある
 事を考へなければ行ぬものだト隱居が理屈を云ひ始めましたれば彼
 の專助先生の少し不平の様子で前も置し繪圖面を懐に捻込み專それ
 じやア逆も御相談相手もありませんから何れまた其内よ伺ひませう
 ト碌々よ挨拶もせず奮然として立歸りました(ヒヤ〜〜〜)
 道人の默然として其傍も居て右の隱居の理屈を聞て殆ど感服致しました

ナせ感服したかと申しますと抑々且大政府が專賣の權を人民よ與へら
 れましてから日や深からざるよ新發明品および改良品の日よ増加する
 の我々の最も喜び且つ國の爲よ賀すべきの美事で御坐います(堅いッ〜)
 故よ道人の新發明品および改良品の益々増加し專賣者の益々許多あらん
 事を願ふもので有ますれば更に隱居も向て唯今某氏が携帶て参りました
 器械とあり如何も發明品で又如何ある功用を爲すもので御坐いますト問
 ひければ隱居答へて云へる様これの苟くも人の發明も係もので御坐るか
 ら叨よ之を吹聴する事の出来ませんト一本喰ひてみ道人の頭を搔か
 如何様これの道人も心附ませんでした然らば右のお話の中に成べく丈
 の直段を安く賣て世人の便利ある事を考へ云々と仰せられましたが道人
 が愚考するも直段を安く賣て世人の益を計るの商賣人よ向て常に望む所
 で強がら專賣品に限りませうと云ひましたれば隱居曰く君の疑ひも
 一應尤もの様だが決して左様でない如何かと云ふに彼の商品あるもの

互ひに需用供給の便を計ると云へども大率私利を先にして公益これに次
 むので専賣品の如きも此の範圍を出ない者といふ云へ既に専賣權を得る以
 上の外にこれを製造するものも無ければ販賣するものも無く所謂一人に
 め丸儲けだらうら成べく丈の直段を卑くし左様して世の公益を計らなければ
 ばあらぬ(ヒヤ)然るに此處の道理を解せずして一つの専賣權を得ると
 無暗に賣價を高くして一足飛ぶ大金を掴み俄大盡み爲らうと思ふが爲に
 便利の物品でも人々が其直段の高いを驚いて使用を怠る等の類が無いで
 もあつて(ヒヤ)何程便利な物品器械を發明したるらとて人が之を使つ
 て呉みければ折角辛苦して發明しても恰是マイヤモンドを物置の隅へ突
 込で置く様なもの何の役も立たぬ(ヒヤ)夫れだから愚老の常々主
 張する所も他でも無い例へば茲の一の發明品あり又の改良品ありと假定
 せられよ而して舊來のこの發明品の代りに斯々の物を使つて居つた又舊
 の品の斯様に不便だから此處を斯く改良したと先づ舊來の物品と比較で

舊の品が賣價一圓あれば専賣品もまた一圓を販賣する様も舊來と比較で
 見れば品物も便利あり直段も別段高く無いと云ふに至らば誰しも便利
 な物を捨てて猶不便を宜しとする者の恐らくあるまい(ヒヤ)斯く云ひ
 其様も馬鹿げた商法の出来まいと云はるゝ人も有り知らんが元來専賣品
 が右申す通り普通の商品と大なるに趣きの違つたものだから縦に利益の
 薄くても他と競争する者が無いから賣高の多きも必定あれば所謂數で
 ナオものにて湖き利益も積で莫大とある道理あり然るときは一舉兩全の
 策で發明者またの改良者も却つて満足の思ひを爲す事もあるだらう是即
 ち愚老が専賣品の成べく丈に安く賣つて貰ひ度と云ふ所以ぢや(ヒヤ)ト
 道人この講釋を聞て如何様御尤もと答ふるの外有りませんでしたるが世
 の専賣をする御方々も此老人の説を御賛成さされては如何でせう(ヒヤ)ヒ
 ャ大喝采

○少年の風流に安んず可からず

詩を作るより田を作れ何某よりの金貸よあれトの何人の發言で御座いま
 すの道人とても未だ其發言者の姓名の何の何兵衛やら存じませんけれど
 も是の古來より人口に膾炙する語で御座いまして道人も亦これを小耳よ
 狭んで居ります蓋し確言と思ふからで御座います(ヒヤ)シテまた何故
 どうした譯でこれを確言と思ふ哉と言ふと諸君マア試みよ考へて見給へ
 イツヲ立派お詩を作ッて李太白草履を揃へ口伯樂天茶を持て来いと云ふ
 様ま爲つた處で社會の益に瓜の垢やども成らぬ又拙者の金ばく附の
 何の某ありと自分免許で威張て見た處でこれも諸人の信用を得なければ
 唯我獨尊と云ふまでの事で少しも感心すべきことでの御座いません(ヒヤ
 ヒヤ)然れハ其社會に益を爲さぬ詩作を勉強して詩韻含英や韻府一隅を
 捻練て平仄韻字は汲々するより一筆を田を耕して社會の鴻益を計るよ如
 の御座いますまひ唯我獨尊を極込んで社會の笑ひ草とあるよりの筆を金
 貸よある工夫を考へるよ如の御座いますまひ(ヒヤ)シテ詩よして己よ斯の

如しこれと同格ある和歌あり俳諧あり凡そ意を樂ましめ心を慰ましむる
 の風流のその風流お樂しむべく慰むべき時機に達して後よこれを爲すの
 敢て差支へあき事で御座いますれども近來の大ぬよ之に反して前途を
 遠く社會の義務と云ふ重荷を脊負て居る少年子弟よして徒らに詩歌を詠
 じ俳諧を事とする人が御座います是れ道人が餘計お世ッ介おがら一言
 以て注意を促ですの主眼で御座います(ヒヤ)シテ道人が斯の如く論端
 を開きますれば諸君あるひ將よ之を駁して云これんとす骨皮道人何ん
 を其れ大馬鹿ある何ぞ其れ三太郎なるや道人の知らぬか詩のこれ志し
 を言ふの要具であつて意を溷々の中に寓し心を境域の外よ放ち諷刺諷諫
 を其間に呈し古今の成敗を數字の間よ見はし人をして喜怒哀樂憂悲怨恨
 を心胸よ動かさしむるもの詩歌よ由らおければ能はぬ事である左れば
 風流の斷具よのみ止まらん况はんや古來慷慨の人士鮮血を一言よ濺ぎ心
 肝を一勺に獲する者あるをや然るよ骨皮道人の自分の大馬鹿三太郎を悟

びすして却て人を大馬鹿三太郎の仲間と爲すこれ即ち青い眼鏡を掛て社
 會の人を相し社會の人のみぢ蒼い面附だと鑑定するの見當違ひのみトヒ
 ヤ〜諸君よマア其様を尻痴がたい小理屈を並べあいで道人の申す處を
 お聞ください道人の素より大馬鹿三太郎で御坐りますれど聊か詩歌の
 功用如何ならぬの聞嗽ッで居ります然れども道人の詩歌の功用如何を論
 究して社會の人士に向ひ茲に論陣を張て飽迄是が是非山直を争はんどす
 るの趣旨で御坐りませんから古來の事蹟の姑く措きたい少年子弟よして
 之を嗜むの宜しく無いとの心持を述んと欲するので御坐ります夫れ之を
 往古に徴すれば諸君の仰しやる如く隨ふん人をして感嘆せしむるもの舊
 起に堪ざらしむるもの或ひの金言とすべさるもの龜鑑とすべさるもの無い
 での有りませんけれども斯様を詩歌の万中の一ツあるか無しと云ふ位で
 續ひ古人の詩歌だと申しても悉く金言だ龜鑑だとの確評を下すことの出
 來ません已も古人の詩歌でさへ右の譯ですから其糟粕をシヤブル近時に

於ての猶更の事で御坐ります殊も近頃の詩歌の流行も拘らず其吟咏す
 る處大率風流の器具の様を爲て居りませから唯月を觀て月の皎潔を賞し
 花を眺めて花の艶麗を咏するもの百中の九十九で眞正の志しを吐露して
 男子の鉄腸を見はし確乎不拔の一言を以て後世の人の龜鑑としても宜様
 かももの幾んど稀で御坐ります(ヒヤ〜)故にその吟咏する處の詩歌の早
 了云へば何年何月何日何云ふ面白い事であつたと又何時何處其處
 は於て斯様を快樂を催したとか我記憶も便あらしむるの紀念碑は外から
 ぬ様で御坐ります果してこの紀念も供し記憶も備ふるの爲からば何れも詩
 や歌の小面倒くさい平仄やテニヲハを取調べずして簡便ある文章を以て
 記す方が餘やど手軽で御坐りませんか(ヒヤ〜ノウ〜)然れども身の
 世は社會のため幾分の利益を興へ年もまた老て心を浮世の外に養ふの
 人々の詩を作り歌を詠するも亦精神をやしあひ鬱氣を散するの一助あれ
 ば素より道人が兎や角と嘴を容る譯で御坐りませんが彼の少年子弟の

若輩が老後の快樂を前借して市街喧鬧の地に居ながら身みづから東坡居士と擬して麋鹿吻々の空言を吐きまた煉化室で椅子と腰を掛て居ながら杜牧其人を氣取つて酒を杏花の村に尋ねるの寐言を並べて得意然たる人往々として御坐います就中甚だしさに至つて之を雑誌あどへ投じ其名前の傍へ御丁寧も年齢を記入して自己のまだ年の取らぬが此の如く能く空言を吐つと云はぬをかりは誇り顔の人も御坐いますか道人の是等の吟咏を見る度毎又感心とか譽申したいが却つて慨歎のおもひを致します(ヒヤ) 諸君も御承知で御坐いませうが西洋人の言も徒らに光陰を費やすの無上の奢侈ありと云つた戒めが御坐いますか此言葉の實に我を欺かざる金言で御坐います(ヒヤ) 夫れ少年の恰も一生の春時で才能の種子を下す時で御坐います其春時にして種子を下すの肝要あるは頓着もせず彼の空言寐言を吐て貴重光陰を費すとの實も少年子弟の爲よおしめ且つ社會の爲に深く憂ふる處で御坐います(ヒヤ) 世の少年よして風流を

嗜むの諸君よ冀はくこの空言寐言の老後譲り宜しく有爲活潑の精神を養成して以て幾分か社會に對する義務を盡さるゝの計畫あらば當に道人の満足つかまつる而已ならず即ち社會一般の幸福で御坐います(ヒヤ) 去りながら我が詩歌の鬼神を感泣せしめ天地を鳴動せしむるの力ありと云はるゝ御方あらば道人のたゞ黙然つて屁突張るの外に御坐いません (天喝采)

○奉公人の遣ひ方

古來日本の習慣として奉公人を取扱ふこと恰も牛馬を遣使ふと一般の弊風がありましたして主人の毎日 旨い物の喰飽を仕ながら奉公人よいたい 纒心かりの味噌汁か左もかい時古澤庵は香の物ぐらゐで三度の飲を喰し又た偶も小魚の類を喰せる事がありましたも多くの残り物の肉一骨九即ち肉が一分で骨が九分と云ふ最も憐れ果敢かい魚で骨湯をして其汁を吹ふよりの外に喰方も手段もかい代物で御坐りますれど是を頂戴する

お三とんや丁稚小僧の奉公の始めの弊風が身染渡つて居ります
 かび取て不平も唱へず愚痴も覆さず彼の肉一骨九の残り物を此上もおい
 御馳走と思ひ根氣の積り限りの肉をホチンリ骨をシヤブつて鹽氣の全た
 く跡を絶や至つて漸く見放す様も不憫ある了簡を養成し(ヒヤ)殊もま
 た主家の者の夜早く寐て朝の遅く起るの自由あるにも拘らず奉公人に
 の之と反對の規則がこしらへて有て夜の縦ひ閑暇でも大抵十二時頃まで
 の寐かさず朝の六時前もツキ起すなどの嚴則ですから夜にゐると小僧
 の火鉢も向て丁寧にお辭儀をするやらお三の行燈に對して船頭の身振り
 を稽古して一枚の雑巾も一週間経なければ中々落成しなると云ふ有様で
 御坐います(ヒヤ)故に古人もこれを可愛想と思ひましたらして「初雪や
 あれも人の子稱ひる」と口吟みましたの如何にも能く實情を穿ちまし
 たもので御座います(ヒヤ)然れども是の昔の事で當今の此の如き弊
 風を去り奉公人も少しの氣樂權妙な熟語を得ました様での御坐ります

と中々どうして十軒が十軒ことごとく皆改良主義に趣いたとの見受られ
 ません(ヒヤ)依て道人の奉公人から辨護を依托せられた譯でもあく惣
 代の委任を受た筋でも御坐いませんあれども右の奉公人の使ひ方につ
 少々計り鄙見を申し陳やうと存じます(謹聴)斯く饒舌つて参りますと
 何しても年季小僧の窮屈話しから彼の小僧がその窮屈を首尾よく卒業し
 て主人より暖簾を分て貰ひ初めて人間の仲間入りをする迄の習慣も是非
 この處お辨じますのが順序の様と思はれますれども是等の事の已は新聞紙
 上おどのにも説示された人もある様と思えますから道人のその洗濯も焼
 直しとをヌキにして一足飛ぶ奉公人使ひ方の改良説を擔ぎ出さうと思ひ
 ます(謹聴)さて其改良説とい如何なる小八の間敷ごとを擔ぎ出すかと申
 すに決して學者理屈をあらべ立る譯柄でなく唯一寸と一ツのお話を
 致すをかりで御座います道人ある商家の主人と懇意にして居りまして平
 生に往來して居りますがこの主人の經驗にも富み實歴もある人で御座い

ます一日例の如く談話の砌り奉公人の事を語り合ひました處主人の斯様
名説を吐きました其話し曰く

往古から奉公人を使ふは慈悲の深いのを却て嫌ひ世に所謂まゝ子取
扱かひにするを一般の習慣として居りますが是は大變お大間違ひの
事で御座います何故あれは奉公人の主人の羽翼とあり又手足ともあ
りて労働くものですから我眷族よりも一等も二等も上まふく位の心
持で使ふが肝要で御座います俵令は彼の時計を御覽じろ彼の時計
の時を報するの器械といふ云へ若しその器械車のチヨキ／＼回り方が
不充分であつた日又のチン／＼時を報すべき時も報する事が出来ま
せん是れ見やすき道理にして主人と奉公人の關係も亦此の通りで
御座います今この道理を以て推すとき主人の社會に向つて多少の
義務を盡す事の出来るに取も直さず奉公人の労働は因ると云ふも強
がちコヤ附け理屈で有りませぬ先づ斯様も考へて見ると其労働

に報ゆるに相當の義務を以て仕なければ彼もまた主人も報ゆるも其
義務を盡しませんこと猶油を注入なければ器械車が十分に回轉せし
同じ事で御座います故にこれを經濟上にとるも道理上も及ばずも奉
公人を牛馬と同等の取扱ひするに大變お間違ひのと考へます依て樊
家の舊來より奉公人を取扱ふよこの心持を以て致します殊も食物亦
どの別段に馳走する譯に參らねど我眷族とちがひ身体を労働せる
もので御座いますから成るべく丈に健康を助ける様も氣を附て遣ま
す云々

道人この話しを聞ましてお世辭と追従との縁を離れてナールやど道理で
貴店が繁昌するとの語を發しました(ヒヤ／＼)夫れ外國まで日曜日その
外の休暇もある様子で御座います日本にて未だ斯様お骨休みの日連
のちく唯一年三百六十五日夜も晝も無茶苦茶にノベツに働かして然して
少しく翠玉の皺を伸すの僅かに一夕年の中に二度即ち一月十六日と七

月十六日むくりで御座いますから奉公人の身も取つての習慣との云ひから随ふん閉口の至りで御座いませう(ヒヤ)故に其邊の主人に於て少しく斟酌して縦ひ前條の話の様お行すとも天保時代の家法を廢しす西洋風に改良を願ひ度もので御座るト一商家の家法を見本として奉公人を召使はる、諸君に一寸御相談いたします(大喝采)

○奉公人の心得

道人の前段に於て奉公人の使ひ方と題する一席を饒舌りましたが奉公せらる、諸君が若しこれをお聞もありましたあらば骨皮道人の流石に旨い事を云ふ成る程尤もの言草だ(ヒヤ)賛成)早く此改良説が一般お行はれ、バ宜と目の栗玉を皿にして世間を見渡さる、に相違ない左様あると骨皮道人もココ顔で低い獅鼻も接足しをえて天狗の孫おありさうだがドッコイさう旨く計りの間屋で御しません(ヒヤ)何故おれバ唯主人家の方おかり目方を軽くした處で奉公人衆の方で目方又變りが無けれ

バ矢ッ張り何の役も立たせんからッコレこの奉公人の心得と題する一席をお饒舌して釣合をとる積りで御座います(謹聽)さて奉公と云ふ言葉の彼の封建時代の名目で御座いまして所謂君又仕ふれバ大切の一命まで差上ると云ふ筋合から起つたもので御座いますから昔しの商買の家に勤めする者も奉公と云へバ矢張り士族さんが君に仕へると同様で大切の一命まで抛り出した心持で居た事ですから一旦奉公おたらぬ其主人が何様も無慈悲で有らうと又如何様も無理お扱ひ方を仕やうとも唯へいへいと柔順又頭をさげて我身の出世を第一に心掛ましたから随ふん立派お人間も出来ましたが當今の已奉公と云ふ名目さへ無くあり一般に雇人と稱へる様になりましたから自然と奉公する人の心持も昔しと違つて權利だとか義務だとか難だとか難だとか辻つたとの轉んだとの互ひも小六ヶ敷理屈を並べ立てる右様で御座いますから使ふ人も使はれる人も中々六ヶしい事で御座います(ヒヤ)然れども其權利とい斯云ふもの

だ義務との斯云ふものだと眞正の道理を辨へて居る人の素より不都合な
 けれど彼の自由と我儘とを取違へ權利義務と得手勝手との引出し違ひを
 知らぬいで唯口の先計り進歩したものの十中の七八で御坐いまして又この
 引出し違ひをして居る人達の何事を志さずも大率ね中途半端で挫けて仕
 舞ぬますから折角うまく覺えのけた業体も此蜂とらず又至るものも亦澤
 山御坐います(ヒヤ)而してこの此蜂とらずに至るの何より起るかと思
 しますと唯耐忍力が乏しくして辛抱が出来ぬいと云ふに原因するで御坐
 いませう何故かと云ふに男子たる者が一たん何商賣も成らう何の業を覺
 え様と目的を附た以上の縦ひ食物が少々氣に入るまいが主人が少し位
 小言を云はふが其様も些細な事柄の順着なく何が何でも宜から我志さ
 す所の業体さへ覺ゆれば夫で宜と決心し苦の種を蒔て樂の花を咲せる處
 又目を着て居りさへすればバツマリ立派な商人にでも職工にでも成れるに
 相違ありません(ヒヤ)然るに世に所謂奉公人根性と云ふものが手傳ま

して些細の事に屈託しヤア自己の主人の毎日香の物をかりで飲を喰
 せやがる此様か處に永居しての健康も害があるから早く寄留替をするお
 極るとか或ひの渠奴の自己と同等の責任を帯て居ながら怠慢で計り居や
 アがるから自己も怠慢で遣う杯と妙か處に理屈をつけてクレ始め夫れか
 ら東西南北よまごつき大切を一身を誤るあどの皆これ耐忍力も乏しく辛
 抱が續かぬから起るので御坐いませう(ヒヤ)左れば主人の家政のみ
 を改良したからとて之は使はれる者も其心を改良しおければ第一我身の
 損をかりでなく主人も亦迷惑する所も御坐います(ヒヤ)且また親が我
 子を他人に預ると云ふの驕り云ふ可愛兒に旅をさせる主義で他人の中へ
 放り出せば世間の交際方も覺えまた業体を覺ゆれば當人の勿論自己もま
 た年取て氣樂に暮す事が出来ると云ふ慈悲慈愛の心から奉公させるので
 御座いますから唯生意氣と小理屈を覺えた計りでの親に對し世間へ對し
 ても誠に相濟ぬ事で御坐いませう故に奉公せらるゝ人々の先づ堪がたき

を堪へ忍び難きを忍び眞正の義務を盡し眞正の権利を養成して親と主人に心配苦勞を掛ぬ様に辛抱するのが肝要で御坐いませう(大喝采)

○看板の分り易く書べし

昔し或人が蜀山先生の許へ掛行燈を持って行て先生はあはだお手数恐れ入りましたか此行燈へ湯煮卵と書て下さいと依頼ましたれバ蜀山先生のヨシく書て遣うと筆と執てまづ眞正面へうでたまごト書その一方へのゆでたまごト認め又一方へのい。でたまごト三方あがら違へて書れましたから依頼だ人の不思議と思ひまして是の先生いかいお譯で斯様に三方が一ツ宛違ふので御座いますと問ひましたれバ蜀山先生の澄し込んでイヤ何云ふ譯も斯仕た絲瓜もあい總て看板と云ふものの人には知らせる爲の物だから何人よでも知れる様よ書なければ折角看板をのけても看板の機能が無いじやあいかッコデ自己の何人よでも分明様よ色々口で云ふ通りに書たのじやと云はれて其人のナ、ナールやど流石の蜀山先生と云はれる御

方だけ有ると感心した事があるとの世お云ひ傳へたる話して御座います
が道人もこの話しを聞てナ、ナール程と感心いたします(ヒヤ)ト古め
かしい話しを擔ぎ出しましたも餘の儀での御座いません近頃の看板の書
方が區々にありました中おの奇々妙々變呆來で抱腹又堪ざるものもあり
又隨ふん小六ヶ敷ことを書たものもありまして其法の不定あいの誠よ
餘儀あいの事で御座います(ヒヤ)殊に斷髮床あどの近頃よあつて其書方
が澤山ありまして一寸これを勘定して見ても斷髮所理髮所調髮所整髮所
粧髮所進髮所あどの種々様々の看板が御座います而して道人が其文句よ
就て考へて見ますと斷髮理髮あどの可あり適當するかと思ひますれど調
髮整髮粧髮等に至つての甚だ請取よくい殊おまた進髮と云ふ熟語の歴史
あどの中よも進髮して僧とある杯と云つてこれの頭の毛を剃落して坊主
にある事ですから理髮と云ふ事と一所にするかア大間違ひで道人の元來
正直者で御座いますから此進髮所の看板を見てコイツ坊主よされての

變だと逃出した事が度々御座います(ヒヤ〜)チット最一ツ剪髪と云ふのも時々見受ますが是も餘まりツツ致しません(ヒヤ〜)また氷店の看板の一種の書方がありまして氷と云ふ字を中又狭み敢て文字の大小もなく函氷館と認めて横に掛けてあります(ヒヤ〜)見慣れて居れば左様に思ひませんが能く考へて見ると實の可笑き看板で何とか外又書様の無いかと思ひます(ヒヤ〜)また洋服裁縫店やその他でも間々見る事があります(ヒヤ〜)例へば横看板は洋服裁縫店と書たその下は羅馬字で YOFUKUSAHOMISE と書てある杯の處で御座います(ヒヤ〜)漢字を見れば洋服を仕立てる店だと承知も出来ずあれども羅馬字で YOFUKUSAHOMISE にては肝心な西洋人が見ても何の事やらサツパリ分ります(ヒヤ〜)何の事やら分らぬ位から寧ろ書ぬ方が宜しいかと思ひます(ヒヤ〜)また漢字で書て夫れは假名を附てあるのを見受た事もありますが假名を附ければ讀めぬ位から寧ろ始りから假名で書た方が宜ろしいのと存じます(ヒヤ〜)道人この頃

戯れ又處々の間違ひ看板を調べました又町所の憚ッて茲の申しませんが俗湯價云々と張出してあるの浴湯價の誤りあるべく券煙草云々と書てあるの巻煙草の誤りあるべくいちごやと書てあれども其暖簾も越後屋とあるを見ればいのゑの誤りあるべくガラス鐘類と書てあるの鐘の誤りあるべく更料と書てあるの更料の誤りあるべくと斯目を附て見ると一寸しても此位ありますから此上よく氣を附て東京中を明細に取調べた日又随分奇々妙々な看板を見出す事が出来ませうけれども道人も其様な閑人でありませんから唯やんの一寸氣が附た處ばかりをお話し致しましたので御座います(ヒヤ〜)故又看板の揮毫者の彼の生意氣ものに頼ま尋ねて見ますと生意氣ものが利功ぶつて湯銭と書バ宜又浴湯價あど妙かお手細工を遣かすから終に俗と浴と鐘と鐘との如き頓珍漢の大笑ひを招くので御座います(ヒヤ〜)又故又看板の揮毫者の彼の生意氣ものに頼ますまた文字の巧拙の扱ひも何でも分り易い様又書のが第一で御座いませ

○腹の中の笠を脱べー

エヘン上見れば及ばぬ事の多かりき笠被てくらせ己が心よト云ふ古歌の
 餘程うまいとか名吟だとかの評判で御坐いまして年寄株の人々の兎角よ
 この古歌を引合ふ出してお孫さんや息子さん達に御意見される事の道人
 の時々小耳に聞およぶ所で御坐います(ヒヤ)左様して其引合ふ出され
 る御年寄株の御講釋を承はればその御説は曰く上見れば法圖のあいもの
 又下みても限りのあいものだから其法圖のあい上を見て贅澤を了簡を
 惹出さぬが宜い何でも下の方さへ見て居れば決して失敗のあいから人様
 が土藏や煉瓦の家屋を建築ても之を浦山敷と思つてのあらんぞヨまた人
 様が幾ら奇麗で立派な着物を着て居られても決してこれを真似やうと思
 ふ了簡を出すおヨ何でも身分相應と云ふ事を考へて腹の中笠を被て上
 を見ぬが宜ト是の已に御老人仲間の輿論とあつて居る様で御坐います(ヒ

ヤ)處で道人が思ひますよの成程この御説も一寸一理あり御尤もの様
 での御坐りますれど是の時と場合とを御存じあい御講釋ありと悪口を敲
 いて反對の位地は立たくあります(ヒヤ)何故かれ天保弘化の年間と
 今の明治年間の花盛りといふ九で一寸坊と大佛様などの大違ひでして殊
 人々の精神も大層ち相違で御坐いますから彼の笠被てくらせ一件の杓子
 定規を以て何處までも押通す譯よの迎も参りますまい(ヒヤ)故又道人
 の是等の人の反對は立ち憎まれ者とあつて斯様を陳腐の御説の廢棄にせ
 られん事を希望する者で御坐います(謹聴)今その譯柄を手短お申し陳
 ますれば如何様むかしの家老職の家筋に生れますれば縦ひ馬鹿で有らう
 が薄野呂で有らうが其職を繼の規則でありましたから其他の大工や左官
 の家に生れたものいッヲ利功であらうとも迎も目上の人よ勝ことの出
 來あかつたから其當時の何でも下さへ見て居れば夫で差支へのあい有様
 で御坐いましたけれども此明治の花盛りの決して左様での御坐いません

あら縦ひ大工の息子にしる左官の弟子にしる智恵の澤山ある奴が旨い汁を吸ふ世の中で御坐いまする彼の黒塗馬車の意氣堂々も金モールの大禮服ヒカくもみち自分の智恵ぶくろ一ツで出来る次第あれバ右申す腹の中も笠を被って暮せなど、卑屈を了簡に養育まして、矢ッ張り大工の何處までも大工左官の何時までも左官で其身を終るで御坐いませう(ヒヤヒヤ)されバ世の壯年諸君の申すまでもなく彼人でも此人でも皆赤腹の中笠を脱捨てたとひ出来ると出来まいの兎も角も何かして彼の上等の地位に達したいものだ何とかして煉瓦造りの家屋に住居たいものだと成べく上を見て其の目的を達する様に心掛るが宜ろしう御坐るト煽動申すの煽動申すもの、蛇の石垣を登る様み上りかけてハッパッパ上り掛てハッパッパと充分の準備もせずして胡麻化子の手段で事を爲し遂やうとの夢々おもひ給ふ赤ト是で一切お仕舞(大喝采)

○先生々々

居いよ向つてオイ誰某と呼捨にするのも氣の毒あり去りとて誰某さん何何君あど、丁寧と呼ぶ譯にも行かずと云ふ時又當つてオイ先生、何をして呉れ給へとか是を斯して呉れ給へとか一寸先生、と呼んで胡麻化子とて穿つて川柳子の先生と云はれる程の馬鹿ぢやない」と遣かした左様で御坐います成程先生、と呼ばれるも善悪あり又その人にもより場合にもよるもので御坐います(ヒヤ)早く申せバ同格の人や或ひの自分より目上の人に無暗先生、と呼ばれて何だか小馬鹿にされる様赤心持が仕まして根ッくら有がたくさい而已でなく元來先生と云ふ言葉の支那の國から到來の言葉で日本で申せバ師匠英利で云へバマストル獨逸でレーレルと云ふも皆同じ事で人間の名目中取つての餘程貴き稱號で御坐いますすら濫に先生、と云されるのハ小馬鹿にされ愚弄されるは相違ありません(ヒヤ)さて先生と云ふハ右の如き貴き名目でありながら彼のひやかし半分は先生、と云ひ初めましたのが習慣とさ

りまして近來又至つての味増も糞も誤多雜又何も先生これ無暗
矢鱈に先生くと呼ぶ様も成りましてうら先生くと呼ぶ人も先生く
と呼ばれる人も左までの尊稱とも思はず又ひやかしの言葉とも氣の附か
ぬ又至りましたの誠には是非もあいな次第で御坐ります(ヒヤ)去りあが
ら先生くと呼ばれるを愚弄と思つて居る人のまだしもの事で御坐いま
すれども其先生くと呼ぶれるを真正面よ受て獅子鼻をヒコつかせ自己
の人が先生くと呼び頻々尊敬するから何かの先生よ成たのかしらマア
何又致せ先生くと呼び他人に尊敬されるたア有がたいト自分よも何の先生
やら分らね唯他人が先生くと呼ぶ又伴てオツ又天狗顔する生半熟の
先生も往々あるさうで御座いますが是等の先生の如何な御了簡やら何云
ふ御心持やら道人あどの無學者よ少し解し兼る次第で實は憐むべく又
お氣もじ様の事で御座います(ヒヤ)何故また之をお氣もじ様かと申し
ますと當時の如き先生くの名目も大安賣の下落とありました以上の縦

ひ先生くと呼ばれるも所謂一山百文の仲間よ入れられたと同様で御座
いまして先生くと呼ぶ人も後の英吉利のマスタール獨逸のレールの如
く真そこ腹から尊敬して先生くと呼ぶのでなく全く正味の處の愚弄
三分に胡麻化子呼びが七分で唯口先をかりのお手輕様で先生くといふ
のだからで御座います(ヒヤ)左れば先生くと呼ぶれて獅ッ鼻をヒコ
附せ天狗然と構へ込むより寧ろ人を馬鹿にする失敬お奴めかと薩摩肌
で立腹した方が宜い様も思ひますれど何れも致せ人よ持上られて天狗に
あるの餘り感心いたしませず况て他人よ持上られる位でいまだ半熟あり
また立腹した處で笑ひ草とあるまでの事ですから先方から眞に頭を下げ
閉口して先生くといふ云つて来るまでの天狗もあると見合せ成さるが肝
要かと存じます(ヒヤ)また先生と云ふ言葉も最う少し直を上げて貰ひ度
と思ひますれど最はや骨がらみと成りましたれば療治の行届かぬもので
御座いませうか一寸諸君へ御相談いたします(喝采)

○媒灼人の必要を論じ併せて其改正を望む

諸君よこれの少し妙論題で御座います。が饒舌り序で又山百文として一寸お話し致しませう。扱甲と乙との中間又立入って聳とり或ひの嫁入を世話するを媒灼人と申します。而してこの媒灼人と申すもの、世界万国のづれの地へ参りましても有るさうで御座います。が先づ他所の國の事、何でも宜として我日本で見ましても此媒灼人と云ふもの、至極結構な世話人で縁組の時は是非ともかくてあらかい道具で御座います。(ヒヤ)故に粉糠三合ある無し、又拘らず聳に行もの、万事媒灼人、又まかせ夏冬の道具をまとめて安火と縫團扇を持参する花嫁さんも媒灼人に依頼して縁組した方が双方の爲よろしい。又相違御座いませぬ。(ヒヤ)何ぞ媒灼人に依頼するが宜かと云ひ、早い証據が彼の物置の蔭や臺所の片隅で直接又相談の出来た赤繩の出雲の神様の御取持だの何のとの云ふもの、纏りも早けりや打ッ破れるのも早い恰と漆の名代に飯粒を使用した様で御座います。

(ヒヤ)道人この飲粒夫婦すきはち媒灼人あしの無造作社會を見ます。又出雲の神様の御遊戯か、存せねど貧乏人の婚禮で長持があいと少し古臭い洒落あがら何云ふものですか。長く治りませぬ。夫れハナせ長く借白髪まで治らあいかと云ふと其處がソレ出来合の功能で第一餘り心安く過て男女の分界が無茶苦茶でお互ひに我儘と云ふ奴が手傳つて夫れから男女同權を妙處へ應用して彼の都々一子の所謂だん女同權とり間違へてお前も越後か私しもと云ふ様な見當ちがひの生聞噛りだら溜りませぬ。亭主がスコシ亭主風を吹して女房どんの横面を吹とサア女房どんも黙止つてその風又吹れて居あいか、負口先の少し動き過る氣質か何りで針程の事を天秤棒やどよペラ、饒舌り出すと亭主も忌々敷から此土多福に尻固魔されて溜るものかと景氣附て來る夫れから亭主が馬鹿と云へば女房どんの安房と吐鳴り女房どんが頓智機と云へば亭主の漂碌玉と罵り其果の播鉢が疊の上で踊を躍るや、播木が障子の骨で輕業をする夫りら

又組打とあつて髪を巻り腕又喰ひつぎ或ひ泣き或ひ怒りヤタヤ大
 亂痴機の末が何治るか云ふとサア出て行けム、出て行くと芝居の大將
 見た様もお互に威張つて破綻るのが通例で御坐います之を明治年間の
 開化した三世相で見ましたら男女時計の針の性も情薄くして大に
 悪しとでも書てあるかも知れませぬ何故あれや或る都々一に「お前と私し
 の時計の針よ逢ふと思ふとすぐ別れ」と云ふ文句があつてお負又大抵のチ
 ン／＼のら始りますから「ヒヤ／＼／＼」然るに縦ひ狎噓の嫁さんにし
 る月蝕面の蟹殿もいたせ一旦確かな媒灼人を立て目出たく高砂ヤ一を謠
 つて添付にすれば中々容易き事での打破れませぬ況して三界の首極とあ
 る子供の飛出した以上の猶さら手輕の譯も參らず何しても斯しても事
 穩便に濟さねばあらぬ仕誼とあります自ら家内陸敷くらすに至る
 の抑／＼媒灼人の功能與つて力ありと申さなければありませぬ「ヒヤ／＼」
 夫れ媒灼人の功能と云ふもの此の如く大なるもので御坐いますから

随つて其責任も重い道理で御坐います「謹聴」然るも從來の媒灼人より
 一種奇妙奇手列の弊害があつて唯口の先をかりで双方を旨く取繕ひ輕々
 しく縁組をさせる事が御坐いました例へば先方の地面が何十ヶ所ありま
 た公債証書が何程あつて其利子丈でも寐て居て食へる身代だとか或ひ
 の先方の舅姑の丸で猫見た様お好人で頭を張倒しても「ココ／＼」笑ツテ居
 る位だとの難とか難とか有ること無いこと法螺と虚言との共進會で無理遣
 りあしつけサア肝心お御本尊様が興入りよ成と豫て聞しと眼邊りお見た
 との大違ひで身代ひ火の車を廻し剩さへ姑の雷様が太鼓を落した様もガ
 タ／＼騒ぎ立てるの案外に出ツ交しました先方の家も於ても今度の嫁の裁縫
 讀書をろそん何一ツ不自由のさいと思ひの外ぬか袋一ツを縫ふのに半日
 か／＼りの字を横に睨んで二の字に判決を下すおど以ての外なるも呆れ
 返り双方ともおボカンとする様お事が往々御坐います「ヒヤ／＼」これ即ち
 媒灼人の事を輕々しく取計ふより生ずる間違ひと謂ねばありませぬナン

ト迷惑を次第で御坐いませんか(ヒヤ)左れば媒妁人とあつて蟬嫁を
 世話する人の甲乙の中間に立ち法螺と虚言との共進會をなさずして正銘
 正直ありの儘を打明て知つて居る事の遠慮なく知らせ知らぬ事柄の知ら
 ぬと云ひ総て信切を旨として世話する様に改正を願ひたきものあり(ヒヤ
 ヒヤ)斯く申せば夫れ天保の昔の事で明治の今日よ其様な馬鹿げた
 事のあいと云はるゝお方も御坐いませうが無ければ無いよ越た事の御坐
 いませんが併し断然あいとも極りますまいあら生意氣あがら茲に擔ぎ出
 しました(大喝采)

○改良の改良を爲さる可りらぞ

この枝が此様も出者張つて居て見面が宜くあから此處を一番改良しあ
 ければ往ぬと剪刀を以てチヨキリと枝をさりすて又この枝が此様あにヒ
 ヲ曲つて居ての仕方があから是も改良主義でチヨキリと一剪刀やら無
 きア駄目だと自分の氣も入らあ枝でも幹でも心任せにチヨキリくと

悉くはねのけ或ひの邪魔物を去る等も半日の時間を費し左様してサア是
 で出来たこれでもア安心だと手入の濟だ處を見渡すとイヤハヤ飛でもな
 い大失敗で大切を植木を丸でシリ坊主同様にして却て外見の宜あ
 斗であくトウく其樹木を枯して仕舞た後にア、馬鹿な事をしたア、廢
 止の宜かつたにど落膽して悔るゝ素人細工の遺損あの中まゝ有る事で御
 座いまして是をこれ枝を撓めて幹をからすと云ひます蓋し角を矯んとし
 て牛を殺すと云ふも同じ事で御坐います(ヒヤ)さて例もあから奇妙な
 譯の分らない冒頭でお饒舌りを初めましたの別儀でも御坐いません方
 今の騒々乎として開明に趣くよ伴て舊來の事物の何となく見目が宜くあ
 い様も思ひ或ひの不便だとか都合だとか考へる等の處から改良の説が
 大變に流行つて参りまして衣食住の事から日用萬般の事物に至るまで彼
 れも改良せよやア駄目だ此も改良せねば役に立ぬと何でも箇でも改良改
 良で社會を填め百姓の鉄より商人の算盤に至るまで改良の二字を頭よか

ぶり改良の仲間入を仕かければ人も馬鹿か阿房の様も笑ひ自分も何處や
 ら肩身が狭くツて氣の利ぬ様に思ふ處から藝者も改良の三味線を持出し
 娼妓も改良の(ドッコイこれの口が亡ツた)義太夫語りも改良の聲を出す
 ど猫も杓子も改良くと改良説を主張しました是を實行する世の中と成
 りました誠と結構千万至極宜ろしい事と道人も賛成致します(ロヤ
 ノウ)トハ申すもの、茲又一ツ困ツた事の出来のせぬかと持前の苦勞
 姓ですら頻々氣にかゝる事が御坐います(謹聴)今その苦勞の種を遠
 慮なく申し陳ませうから元來改良と云ふ事の悪い所を直して善する曲
 ツた處を真直とするに云ふ事で御坐いますから舊い物の不便を便利に改
 良し外見の粗悪を善美に改良するの素より改良の文字も趣意も背さ
 ませんあれども近來の様に無暗矢鱈と彼も改良これも改良と改良説の熱
 に浮される様も成りまして一概に成程と感心する事の出来ぬ物も御
 坐います(ヒヤ)殊々改良と云ふ事の如何な事やら碌々御承知もさく

唯改良とさへ稱ふれば夫れで人並の交際が出来ると心得居らるゝ人もあ
 る様に思はれました人が改良するから難でも難でもこの難でも難でもと云
 ふの道人の口癖改良せねばならぬと已善盡し美盡せし満足の代物を無
 暗々イヤッリ廻して前申す角を矯んとて牛を殺して仕舞やうも成りまし
 ての折角の改良も何の事やらサツパリ滅茶苦茶で寧ろ改良しあい方が宜
 かつたとの歎を發するで御坐います(ヒヤ)イヤこの開明の世の
 中お其様を迂濶お人の獨りもさかい悉皆残らず真正の改良主義を以て圓
 玉子を四角よし不便お品物を便利おせらるゝに相違おけれども若しく
 万一流行の改良熱も浮される人がありまして道人の苦勞がオボシ當り
 とある様お事がありまして此改良と云ふ事をモウ一度篩ひ直さおけれ
 ばおらぬかと思ひますが是も矢ッ張り苦勞の仕損でせうか諸君(大喝采)

○癖の説

出鱈目居士の言草よ人よ七癖おのれよ八癖と云ひ又出放題山人の無くて

七癖有つて四十八癖と云ひ又古歌に「人毎一ツの癖のあるものを我の許せ敷嶋の道」と云つて御坐います然て見ると苟くも此の人間世界も生て居て十人並の四肢五体五臟六腑を備て居るもの何致しても七癖以上の癖あるものと見えす(ヒヤ)而して其癖の中も善癖と悪い癖が御坐ます其善癖あらば三千三百三十三癖あつても其多いの愛ひませんが悪い癖と來た日やア僅か爪の垢やどでも之を除却るに注意しければありません(ヒヤ)さてまた善癖と申しても其中は用は達かい癖が御坐いますし又悪い癖だからと申しても中は用は達癖も御坐いますから此用と不用との別の要する之を處する者の手段如何に在る計で御坐いませう夫れ善癖とい慈善癖勉強癖憤發癖その他忠信孝節などの癖の皆善癖で御坐いまして泥坊癖狡猾癖横着癖飲だくれ癖そのやか泣癖怒り癖などの皆悪い癖と云ふ事のこれ普通見易い癖で御坐いまして之を處する手段も格別六ヶ敷も御坐いますまいが唯善き癖か悪い癖かを見分けよくひ

癖に至りまして之を處する手段も餘やど六ヶ敷事で御坐いますから英雄豪傑であければ悪い癖を變じて用を爲す事の出來ません諸君も御承知の通り彼の楠正成が杉本佐兵衛の泣癖を使ひましたの即ち英雄豪傑の癖を處するの一斑で是等の手段の就中工あるもので御坐います(ヒヤ)さて道人の是から此癖を處する一件又附て面白くも面白い話しを一ツ致ませうエヘン芝區神田八丁堀邊彌五平と喜多十と云ふ二人が御坐いまして是の彌次郎兵衛と喜多八の末孫だ左様で御坐います此二人とも一ツ宛の癖がありまして彌五平は何も附てもノメルと云ふのが癖で一ツ人又逢ても近頃のノメルかどの或ひの酒がノメルかとう云ひ喜多十のまたツマランくと云ふのが癖で一ツ人に逢ても嗚呼ツマラン近頃のツマランと何もつけ蚊もつけツマランくと云つて居りました然ると一日のこと彌五平と喜多十が途中で出合ました喜彌公ちか頃ツマランあ彌五平此頃の酒もノメン喜彌公手前はまだノメルの癖を止めへナ

彌この畜生め手前の頭の蠅も逐ねへで餘計を他人の世話を焼やアがる手前だッて未だツマランの癖を止めねへぢやねへ喜チット此奴ア一番仕つツたが夫れやア左様とお前の癖も悪い癖だ何故ッて見ヤ家がノメル時の身代限り身体がノメル時の大疵の本だト云ッて自己の癖が善いと云ふと矢ッ張り悪い癖だから此奴ア何かして二人とも癖を止る事よ仕様じやねへ彌ム、其奴ア宜原案だが全体癖と云ふものア偶然と口から出る奴だから急よ廢止譯にやア行めへヨ喜夫れやア其處よも一理あるが其様を事を云ッて居ちやア何時までも止めねへから斯しちやア堂だお互ひに五十錢を賭にしてノメルとツマランを云ツた者が五十錢の罰金を出すと仕やう左様すりやア五十錢の少ねへ様だがイクラ少ねへからツて徒手五十錢を奪れちやア口惜から癖が止りも知れねへから彌ム、好思ひ附だ夫れじやア左様ぢやラトお互ひに堅い約束をして別れましただ(謹聴)夫れから彌五平が家へ歸ッて思ひますよの喜多十の中々もの覺えの宜奴だらう必然

約束を忘れねへ違へねへシテ見ると自己の方が奪れる役に廻るから此奴ア何とかして喜多十よ先きへツマランと云はして五十錢を奪て置きやア自己が其次よノメルと云ツたからとて身錢を切らねへで差引が附からト色々考へましたが何しても喜多十にツマランと云はせる工夫が附ませんから家主の親父に相談いたしますと家主の云ふにやア夫れやア何より易い事だ夫りやア斯すれば宜と工夫を教て貰ツたから彌五平の大喜こびて早速お喜多十の家へ行て彌オ喜多公自己アお前に相談があるのだが喜どんお相談だ彌何かの事でもねへが昨日煉間の親類から大根を百本貰たんだが已ア其處で此奴を干て譯庵漬よ仕様と思ラんだが醬油樽一本は此大根がツマルだらうか喜百本の大根が何して醬油樽一本にツマおツと危嶮く迎も収まるめへヨと聞て彌五平の氣をもみ彌どうだらうツマルだらうか喜どうして迎も遣入めへ彌オいどうだらう喜だめだくと何してもツマルと云ふ癖を出しませんら彌五平の落膽して歸らうと仕ま

すると喜オ彌公お前少めし此處こも留守居るをして居るて呉んねへか自己おア一寸
 其處この下駄屋たまで行いて來くるから彌おんの用ちだ喜ナニ自己おア下駄たを誂らへて
 置かいたから夫を取とり來こんだ彌おんの下駄ただ喜お己れの誂らへの妙めか下駄たで駒下
 駄たでもねへが足駄たでもねへ高脚たの一本齒は彌おんの其様さものヲ穿きて歩あ行いたら
 ノメルだらう喜この畜生ちノメルと云いつたおサア五十錢だ出だせト彌お五平の反
 對に罰金を取とれたから口惜しがつて家へ歸かりまして又前まの家主を話なしをす
 ると家主がまた工夫を教おて呉んねへから彌お五平の大喜こびで喜お多た十の家
 へ飛とこみ彌おイ喜お多た公の將基を一寸ツメテ見みヤ喜おドレレ見みせるト駒
 を手てもとり考かんへて居るて、此奴こア六ヶ敷ありくツマランと偶然う云いへバ
 彌お五平の急き喜お多た十の胸倉をとつて彌おの次郎ツマランと云いつたナサア
 罰金を出だせ喜おウッ苦くしいく五十錢を壹圓まして出だすから此處を放はして
 呉んねへト聞きて彌お五平の益々よろこび胸倉を放はしかららべた壹圓ありやア一
 杯おメルか喜お手て前めまた約束を違ちへたナ其處で自己の遺分で罰金を差引ひて

おけト云いつたさうですがナント諸君よ喜お多た十の實じ又ま才子で能よく惡癖を以り
 て敵と制せいし五十錢を失しはぬの誠ま心かんものでの御座いませんか世よの
 人の癖を處しするの宜よしくの喜お多た十を鑑かんひべきで御座いませう出放題山人
 また云いへる事あり毒藥變じて藥とあると是を之れ謂いひて御坐いませう喝采

○野暮の宜いり意氣の宜いか

諸君よ野暮ナウかア何様もの御坐らうかと云いはい曰いく三文藝者も嫌き
 はれ土多福のお三にまで鼻を撮つれ顔をそむけ目をかくしオヤマア老爺然
 た人だねへ本統に彼の人を見みると嘔吐が出でさうだよト滅茶苦茶よ蔭で惡
 口を言いる、これを野暮か人と云いひます（ヒヤ）また意氣ナウかア何様か
 もので御坐らうかと云いはい曰いく窈窕たる頗る別嬪のお目めあつき婀娜か阿
 嬢さんに慕したはれてオヤマア那の人の本統に罪つか人だよ那の人こそ業平の
 二代目だねへア、左様さ昔かなら業平だが今で云いへバトント松嶋屋の時
 次郎だねへと思おもひも寄よらぬ別嬪さんにまで譽慕はれる此れを意氣か人と

申します(ヒヤ)夫れ野暮と意氣とを比較れば其趣きの異なること恰も
 東京ッ子のチャキと田舎ッ平の芋堀と官員様と車夫さんと噴水器と
 出煙管と鷺と鴉と月と鼈と味噌と糞と耳捲とお玉杓子と豚と象とやどの
 大違ひで御坐います又滅法かいの相違ひの御坐いませんか(ヒヤ)而し
 て何よ因て此の如き滅法界なる相違あるかと野暮と意氣との區域を探し
 ますと外は是と云ふ着點も何にもある譯でなく唯風姿が小綺麗で藝娼
 妓社會の事情に通達して居ると又体裁が不潔くしくって一刻千金の興味
 を解せざるとよ因むかりで御坐いますから世人が彼れい野暮だとか意氣
 だとか嘲するも只外見ばかりの事で真正の野暮と純粹の意氣とを噛分て
 野暮と云ひ意氣と云ふ譯でい御坐いません(ヒヤ)而して如何あるもの
 を真正の野暮と云ひ如何あるものを純粹の意氣と云ふかと云はゞ道人の
 大呼して云はんとす外形の野暮を愧ずして業を爲すもの、純粹の意氣あ
 り上面の意氣を望んで真似を爲すもの、真正の野暮ありと何とされば世

の輕薄者の傍人の外形の意氣にして彼の婦女子輩も好るゝを見てこれを
 羨敷おもひ自己も一番彼奴と氣取て婦女子輩も戀られたいものだと急お
 洋服を買ひ時計を求め俄に大盡の如くに化替り威氣揚々として且みの柳
 霏の酒に酔ひ夕みの花街の花又戯むれ涎を懸者又流し目尻を娼妓も下げ
 其容貌の意氣ある婦女子輩の猶さら道人でさへ横惚せんと欲する様で御
 坐います(ヒヤ)併しおがら修る平家の久しおらぬの譬の通り僅も二ヶ
 月の三ヶ月を出ずして借金山を爲し家主の家賃を責め父母の怒り女房
 の泣き逐み一大騒動を惹起すこれ上面の意氣を望んで真似をする者の真
 正の野暮ある所以で御坐います(ヒヤ)若しそれ有爲の士あらんか活眼
 もつて前途を看破し確乎遠大の目的を立て精神を學術技藝と點じ蓬髮襠
 褌敢て他を憚からず是を以て彼の婦女子輩の悪口の如きの遠くこれを馬
 耳東風も附し去つて更にお構ひ申さず却て嫌で幸ひ好かれちや困ると反
 對を喰はせて己れより謝絶するあり他よりこれを見れば恰も柳下惠の再

來か將た木の股から生れた人間の如く其不意氣よして且つ野暮ある云ふ
 可からざる如くあれども其鉄腸石心よして遂に卓絶の地位無二の榮譽を
 極たる後に巍然たる三層の石室よ住居し嚴乎たる朱門を構へ馬車あつて
 出で妻妾あつて入るよ至る是れ外形の野暮を愧ずして業を爲すもの純
 粹の意氣ある所以で御坐います(ヒヤ)諸君よ野暮が宜ろしいう意氣が
 宜ろしいか道人の未だ糸織の衣服を着羽二重の羽織を引ッのけて婦女子
 よ可愛がられるの人よして苟くも世よ大功を立て偉業を起せし者を見も
 聞もまた事の御坐いません(ヒヤ)其大功を立て偉業を起す人の多くの
 是れ蓬髮襤褸亂粧弊衣よして上面野暮外形不意氣の人で御坐います(ヒヤ
 ヒヤ)故よ滿天下有爲の子弟諸君の輕薄女子の口頭に動されて上面の意氣
 を真似すること無く野暮よして業を遂げ純粹の意氣をお方と爲らるゝこ
 を道人の万々希望して止ざる所で御坐います(大喝采)

○蒼天の高さと人間の慾の測量が出來ぬか

天地間よある物の何でも皆限りのあるもので御坐いますから地球の大さ
 るも日月星辰の遠さも測量する事が出來山岳の高さ河海の深さも亦測量
 する事が出來ます究理の學いよく進み愈々くわしく物として其理を究
 ひる事の出來ると云ふの文明のお蔭で御座いまして實よ不思議で妙々奇
 手列を譯で御坐いません(ヒヤ)夫れ然り然るよ茲に理學博士でも
 數學先生でも究む可からず測る可うらざるものがタツタ二箇御坐います
 开いまた何様おもりのりと申すと蒼天の高さと人慾の深さよ御坐います
 此二箇のもの如何よ文明の力が強よとて其際限を知る事が出來ません併
 し一寸鼻のさき思案で考へて見ると既よ日月星辰の遠きもの之を測り
 知る位だから蒼天の高さも是の何邊でお仕舞よ爲て居ると云ふ事も知れ
 さら者と思はれますが此奴ア餘程六ヶ敷ッて迎も測り知る事が出來あ
 いに相違御坐いません(ヒヤ)其証據よの試みよ天文學士よ向ッて金星
 の大さの幾何ありますか土星の高さの如何程ありますかと問へば天文

學士曰く金星の大なる何億何千万方里で土星の高さ何千万英里ぢ
 やト其詳らかあること自分の翠玉を曲尺で測つたよりも明か
 御坐います(ヒヤ)而して彗星の現出せし時の天文學士忽ち望遠鏡を取
 出して之を看一着して曰くこの星の粟粒の様だが是の地球を距れること凡そ何
 億何千万何百何十何里何町何間あん尺何寸あり此距離よつて其大
 らさを測量すれば地球は何十倍であるとか或ひ其尾の權助の越中
 轎鼻禪より小さい様あれども其長さの地球を七卷半まいて猶
 あまりが有る此星が若し地球が突當つたら地球の忽ち碎けて骨破
 微塵とあると夫れ斯様に理學の進歩して居りますれども未だ天
 の限界を究めたと云ふ事の聞かせんが若しこれを究めました
 たらば耶穌宗徒の勢力の一層振ふで御坐いませう(ヒヤ)何故
 されば天堂の事の細々と取究て其宗徒又説聞すの便利を得
 ればで御座います道人も天堂と云ふ極樂世界ある事の存じて居
 らすれど其結構方の如何様ものやらを知る事が出来ません故
 又今究理の法

によつて其實際を測量し天堂と姿婆との間を輕氣球で往來する
 様になりましたからば宗徒の信仰の實又大したもので御坐いま
 せう(ヒヤ)然れども蒼天の大なる迎も人間の力で測量する事
 が出来ませんから法螺を次て飲否パンを喰ふ耶穌教師其人も
 また蒼天の大なる何の位あると明言する事が出来ません夫れ
 この蒼天の高さが知れぬ位なら彼の天堂と云ふ處も何邊ある
 と云ふ事も知れぬ筈で御坐います左れば其知れぬ天堂を目的
 とするよりの現在目の前にブシ下り鼻の先又見える天堂を目的
 として勉強するが肝心で御坐いませう(ヒヤ)さて天堂の理屈
 にはして置て是より人慾の一件又移りませう人慾の際限さ
 きも矢張り蒼天の限界さきと同じ様で寔に測量の出来あ
 いもので御坐います而して其人慾の中も色慾食慾目の慾鼻
 の慾あど勘定の出来あいなと澤山御坐いますが第一利慾より
 深いもの御坐いますまい一寸これを一口又申して見れば利
 慾の右の色々の慾を支配するの大權を振つて居ると云つても
 宜い

位くらゐおもひので御坐ございます(ヒヤ)故ゆゑに人ひとにして狂癪きやうがくと白痴たわけと馬鹿ばかと阿房あぼうとを除のぞくの外ほかの皆利慾みなりよくの爲ために使役つかたて居ゐる奴隸こゝれであひもの御坐ございません例たとへに精神せいしんを勞ろうするも利慾りよくの爲ために手足てあしを働たらかせるも利慾りよくのため二六時にじろくじ中ちゆう醒せい醒せいかせぐ者ものの皆利慾みなりよくの爲ために御坐ございます唯ただその中なかで毛唐人けたうじんの親方おやかた獨ひとりりが利慾りよくを措かけて仁義じんぎを説とき無慾むよくの顔色がんしよくを粧まふ様ようで御坐ございますれども是これも我道わがみちを行おこなはんと欲ほつするの即すなはち一ひとツの利慾りよくで御坐ございます(ヒヤ)聖賢せいけんその人ひとと云いへども全まったく其利慾そのりよくを絶たへ何を以もつて飲のみ喰くひませう食くはず飲のみずで坐ざして死しを待まちもの馬鹿ばかか左ひだりも右みぎもなくバ發狂人はつがきやうじんで御坐ございます諺ことわざにも命いのちあつて物種ぶつしゆと云いふ位くらゐですからイッラ毛唐人けたうじんでも利慾りよくの奴隸こゝれの免まぬれません況まして凡夫ぼんぷ凡人ぼんじんや狡猾かうわつを看板かんばんに掛かけて居ゐる赤髯せきぜん黨たうの猶なほ更さらの事ことで御坐ございます(ヒヤ)故ゆゑに身みに廉潔れんけつを粧まひ口くちに道徳だうとくを説とき英雄いゆうを氣取きとり豪傑かうけつを真似まねる人ひとの何なんの爲ためかと云いひ唯ただ四五百圓四五ひゃくえんの月給げつぎよを貰もらひ富貴ふきの生活せいかうを營いとなまんが爲ために御坐ございます夫それ君子くんし籍せきも入いらんとする人ひとでさへ此こゝの如ごとき大慾だいよくがありますから其他そなた

の糞桶くそだを擔かつぎ鋤鉞すくを把とるものも天秤てんびん棒ぼうを肩かたよして汗水あせみづを流ながすものも眞黒まろくに爲なつて細工場さいくたうに居ゐる者ものも算盤そろばんを彈ひいて店頭せんだんに坐まつて居ゐる者ものも法螺ほらふき學がく者ものも虚喝うつし先生せんせいも公事こうじ買かひ出だし人ひとも財取さいと人足にんそくも寐兒ねこも黠あや姉ねも貉たぬきも狸たぬきも皆みなち測量そくりやうの出來で来きち大慾だいよくを抱かけて居ゐるも相違さうゐ御坐ございません(ヒヤ)而しかしてこの利慾りよくの誰たれしも有あるものと仕した處ところで其通そのつうじやう常じやうの慾よくだけ仕し方かたが有ありませんが其利慾そのりよくに最さい一倍いぱんをかけ慾よくの上うへに慾よくを張はると云いふ大慾だいよくが極ごくやいけません若わかし慾よくの上うへに慾よくを張はつて遂つひに名譽めいよを地ちにおとし難儀なんぎを人ひとよかけて其終そのまを全まったふする事ことが出來で来きち様ように成行なりゆきます況まして今日こんにちの君子くんしと呼よび英雄いゆうと稱しやうするものも多おほくの鍍金めっき主義しゆぎ若わかしくペンキ細工さいくで御坐ございますから若わかし八方はつぱうに慾よくを張はらば忽たちち其尻尾そのしつぽを顯あらはし貴重きちゆうの鍍金めっきをはぎ微妙びまうのペンキを壓おさすに至いたります故ゆゑに慾よくの深ふかい方かたが宜よしと申ましたるらとて少すくしの檢束けんそくを加そへおければ其人そのひとのお爲ためにありませぬ(ヒヤ)然しかるに慾よくの上うへに慾よくを張はり大慾だいよくに之これを掛かけた人ひとが十中じゅうちゆうの七八しちぱちに居ゐまして道人だうじんも私ひかに心配しんぱして居ゐります

如何も慾の測量が出来ないからと申しても是の各自の了簡一ツもある事で御坐いますから前申す檢束法と云ふ道具を少しお用ゐる下されての如何と一寸慾の深い先生も申し上ります(大喝采)

○車夫さんよ忠告す

大日本全国の車夫さんよ今道人が車夫さんよ向つて人力車を挽く下等の職業だと申さば京坂の連中の尻を捲つて曰く何云ひおはる下等の仕事でもおんでも自己の自己丈の了簡で車を挽のぢやさかいお前さんのお世話もやらん用でもおいこと云ひおはんかト東京はだの人の鉢巻して曰くエーコーおんだとベランメへ人の家業もケチを附やアがって下等たア何の事だ失敬千万お多話言を突アダると頼も青筋を出して名譽回復を訴へられるか存せねども御氣に障らば眞平御免と阿房多羅經の様お前おきで道人に遠慮かく饒舌らして見ると何しても斯しても只今の有様での上等の職業との請取よくいから先づ十目の視る處にまかせ下等の職業

と假定めるも強がら不都合の申し分での御坐いますまい(ヒヤ)併しおがら人が下等の職業だと申したからとて此車を挽ものが無くあつた日おやア俄も差支を生じて至急の用向を辨じること出来ずまた雨降もビシヨビシヨ駟下駄で歩行やうお不都合が洩出に違ひない然て見ると人の足の代理をして駈回るも娑婆の道具ですから之を下等の職業ゆゑお廢止ささい鑑札を返上お仕あさいとお勧め申す譯でのなく又無産無資力の輩にに至極手輕でよい職業あれば腕車を挽のを強がら悪いとの道人も申さねども一旦この仲間入をするとは何年立ても立派に羽織を着て居る人と交際をする身に出世する事が出来ない様お鹽梅もあつたの實に困つた次第で道人も餘計お世ツ介おがらハテナと一思案せねばおらぬ事に立至りました(謹聴)さて何故に何年立ても立派お人と交際する事が出来ないおと其原因を穿索と所謂朱又交はれば赤くあるとやう(古い)一寸その仲間へ加入バ自然と其道も功者もあるよつれて結句これが氣樂だこれが面

白いと云ふケチーち了簡が五臟六腑へ染込んで是でも銭が儲かるから結構だと尻を落附る處の何年まで立ても尻切れ縋絆と半股引の連頼を離れる事が出来ぬのかと想像するの道人の見當ちがひの存じませぬけれど若し道人の想像する通り又相違ありませぬければ其様も活智のさい了簡の西の海へサリとふん流して時々頭の笠を脱ぎ目の砂を拂つて廣い世間を見渡した方が宜ろしいの存じます(ヒヤ)何とあれバイッテ氣樂だ面白いと云つたからと懐中にお金を澤山入れて花見遊山に出掛る人とこれを挽て駈すり回る者とい丸で金巾と縮緬などの差等あり又た家臺店に立て混煮の牛めしを喰ふとチヤンとお膳又向つて會席料理を喰ふとい又ふる行燈と電氣燈などの大違ひで御坐いませう(ヒヤ)況して壯年とさき氣樂だ面白いと思つて其日々々を送つても濟様あるもの人間と云ふ奴の一年又一ツ宛歳の殖る(知れたこと)のですから歳を取て伊賀越の平作爺も宜敷と云ふ様に且那一肩(デハナイ)返り車ですお安

参りませうと夏の炎天も冬の雪降も半股引に尻切れ縋絆一枚で日に照され風に吹かれて東西南北にガラ／＼駈すり回るの随ぶん骨の折る仕事で御坐いませう(ヒヤ)夫れ然り然らば則ち(堅い)まづ老後を考へまた我身を願みて成べく早く楫棒を手離して人並の交際をする様に心掛るこそ肝要で御坐いませんか(ヒヤ)斯様申しますと夫れの百も承知二百も合點だが中々さう口の先でペラ／＼饒舌の様を手輕に行かいと云はるる人も御坐いませうが道人の決して左様で無からうと思ひます元來車夫さんの職業の思ひの外うまい金儲けがあると云ふ事です左れども其日其日に儲ける處の三十銭あり五十銭ありの只無暗に酒を飲んだり餅を食つたり或ひの何だ或ひの何だと大抵鼻の下に押込むの習慣がありましたソレ三錢だソレ五錢だ十錢だ十五錢だと毎日いくらとなく旨い稼ぎを爲さぐら之を片ツ端から飲食又遣ひ果すから丸で尿又水を盛と同様の姿で御坐いますれども(但し)残らず左様と申す譯で御坐いませぬ今斯様に毎日毎

日儲ける錢で例へば三十錢稼だときよの先づ食料を二十錢としても猶十錢の餘りが有りますから之を驛遞局あり又の儘處へ貯金しました五十錢稼だときよ三十錢を預けて置く様又仕たから左程も年數を経ないでも知らずく商賣の資本も出来ませうし好また商賣を仕たいと仕た處が歳寄ッて大層氣樂の事があるべき様に考へますが如何で御坐います(ヒヤヒヤ)去りながら餘計な世話を焼て隣りの疝氣を頭痛も病よりか自分の頭の蠅を逐と云はるゝお方あらば道人の頭を搔てスッ込ひの外御坐いませ(大喝采)

○儘もある工夫

道人の第一席すきは前篇の演説に儘あらぬ浮世と題する論題を掲げて長たらしくお饒舌りを致しまして今また茲に儘もある工夫と云ふ題言を掲げ出しますと何だか前席の温習をする様で御坐いますが決して其様お横着での御坐いませんら一先づお聞願ひます(謹聽)エヘン諸君よ

身体の開暇あり天氣のよしお負も囊中おのづから錢ありと云ふ一件でイッテ遊び歩行とイッテ巫山戯やうと小言を並べる者もおければ意見する奴もあしッコテ毎日く東西南北と名所古跡を始め花の街や柳の巷を廻りてモウ遊ぶ場所があくあつた明日の何處で何をして何して日を暮さうかと思案して身体を持餘す様に成たら嘸かし氣樂お事であらう定めし面白い事が有らうと誰しも思つて居りますが先づ千人のうち九百九十人までの斯様も氣樂お月日を送ると云ふ事の出來おい様子に見受ます(ヒヤ)さて何故よこの氣樂お暮しが出来おいと云へば底がソレ例の儘もあらぬが浮世の一件で一ッ宜ければ一ッ悪い事が附て回り右に樂みが有りますれば左から苦しみが攻て來まするおと兎角お世の中の事と云ふものい色々お邪魔物が御座いまして何事も自分の思ふ意も任せおいの古今を問はず極り切つた事おがら誠に自劣体おけ柄で御坐います(ヒヤヒヤ)いま一寸その例を擧て見ますれば一人息子で掌中の珠と可愛がッて

居りますれば生憎病身で徴兵に免れたもの、毎日薬をかりガブ、飲で居て少しも役も立ず人より利功だ利功だと譽られる才子の早く死んで喰潰しの厄介者の却つて長命し顔貌が良と人の評判を受ける娘の何時の間にか情夫をこしらへて欠落と出かけ顔貌の醜い三平二満の却つて親孝行の者で御坐います。が世間への賣口遠く温順で宜と思へば活智がさしあど、算へて見ると世の中の事の十が八九は儘からぬ事をかりの様に御坐います。が是も儘からぬから仕方がない彼れも儘からぬから是非がいと放り出して仕舞ひ断念して仕舞へば夫れでも濟と云へば濟やうなもの、其中に自ら招いて儘からぬに陥る事柄と何しても斯しても儘からぬ事柄とがありす。即ち前も申せし一人息子の病身や利功者の早死あど、衛生に注意すれば其憂ひを免れる事が出来すし、又真正の教育を施し置けば娘が情夫をこしらへて欠落する様も氣遣ひもありすまい(ヒヤ)左れば儘にある事柄すきはち人間の力で出来るだけの事の成べく儘にする工夫を

考へ無ければなりません(ヒヤ)而して其儘にある工夫と云ふの如何ある六ヶ敷事かと申せば決して六ヶ敷事での御坐いません何事も勉強と注意との四字を後ろ楯として夫れから金を溜めて御覽をさい金さへ出来れば胃頭も申しました千人が九百九十九人まで望んで出来よ、い儘からぬ事も儘よなるに相違ありません(ヒヤ)ゆるゆる事の大小を問はず物の軽重を論せず儘にあらぬ事も何かして儘よ仕度との目的で勉強するが何より一番の上分別の道人の愚考致しますが如何で御坐いませう(喝采)

○眞似するも事よよる

諸君よ道人のこの眞似の一件に附て少し長たら敷お饒舌りを仕様と存じます。又例の手下の長談議かと四嘴面をせず又欠伸を忍んでイヤイヤ四嘴面を成さるお方の勝手は四嘴面をささい欠伸をささる御方の勝手に欠伸を成さるとしてマア兎も角御迷惑でも一通り聞て下さい(謹聴)さてこの世界の中にて獨立専有權を持って居るもの、外の何でも箇でも一

から十まで百から千まで事々物々残らず真似で立切て居ると云ふ話しで
 御坐います成やど能く胸に手を當て考へて見ると左様で御坐いま
 せう先づ人間は無くてあらぬ衣食住の三ツ即ち食物を調理して之を食
 んのも人の真似なら着物を仕立てこれを着るのも人の真似家を建て其中
 より起臥して雨露を凌のも人の真似で御坐います(ヒヤ)扱この衣食住の
 三ツでさへお互ひよ人の真似をして居る位で御座います其やか日用
 百般の事お一ツとして人真似でない事御坐いませ併しおがら是等
 の事お已よ人間の習慣とあり爲すべき仕業と定まつて居りますうら唯人
 並よ食つて人並に働くと云ふまでの事で誰しも真似をして居るとい思ひ
 ません(ヒヤ)然れども茲にこの習慣を破るべき他の物を持って來て魚の
 代りに獸肉を食ひ飯の代りお麵包を食するとか洋服を着て煉瓦造りの家
 に這入り椅子よ腰をかけるると云ふ一段あると之を西洋の真似と云ひま
 す成程これの西洋の真似よ相違御坐いませんシテこれが西洋の真似よ

相違おければ前申す日本風の衣食住その外に致せ矢張り日本の人同志が
 お互ひよ真似をして居るに相違おいと云ふ處に氣が附で御坐いませう(ヒ
 ヤ)故に人の真似を止やうと云ふ日よあると吾人ともに腮が乾上つて
 身体よ病氣が生じますから是等を真似と断定し人の真似の氣が利ぬと
 知りツ、も真似を止る譯よ參らずまた真似と云つたからとて一概よ廢
 止するも及びませんあれども此真似のら生ずる利害得失と云ふもの
 小にしての一身一家に關し大にしての一國の体面お關する事も御坐いま
 すのら善き事の何程真似するよ致せ惡き事の爪の垢やども真似をまない
 様に心掛るが肝心で御坐いませう(ヒヤ)諺よ鶴の真似する鳥の水に溺
 れると云ふ事が御坐います是を一口よ講釋して見ると鶴が水の中よ飛込
 んで自由よ魚を捕るところを見れば同じ鳥類で又その姿も似て居るから鳥
 にも魚が捕れさうおもので御坐いませが底が性質によるもので鶴の水よ
 棲ひ鳥あり鳥の木よ棲ひ鳥で元來異性の鳥ですから鳥が水の中に飛込ん

でもダメで御坐います然るを無理にその真似をして魚を捕らうと仕ますからツイ遺損あつて水に溺れ土左衛門とあるので御坐います(ヒヤ)又からすの真似をする鵜と云ふ事が御坐います是れ何した譯のと云ひますと信州の諏訪湖あどよて寒中氷が張つて居るを鳥の嘴で其氷又穴をあけ其傍お待て居て魚の通る處をチヨツと咬へて捕るのを鵜がこれを見まして彼奴め中々うまい事をして稼いで居る自己も彼奴の真似をして魚を捕つて呉やうと思ひ氷を碎て待て居る處へ魚が通ると我性水を恐れぬ質ゆる其穴からドブンと飛込み首尾よく魚を捕たの宜けれど何方も氷が張詰て居てその出口を失ふ夫れが爲め水又溺れて土左衛門とある事がまゝあると云ふ事で御坐います然れば鳥が鵜の真似をするも鵜が鳥の真似をするも何れも致せ遺損あひの同じ事と見えます(ヒヤ)また昔し孔子と云ふ聖人が宋の國へ適れし時よ司馬桓魋と云ふ者が御坐いまして孔子を殺さうと致しました其時よ孔子の少しも驚く氣色なく落附拂つて天

徳を我も生せり桓魋それ我を奈何と云つて桓魋を睨み附られた處彼の桓魋のブル〜震へて逃ました其後よ王莽と云ふ人がこの真似をして天徳を我に生せり漢兵それ我を奈何と怒鳴ましたが漢の兵の怖いとも何とも思はず何だ小癡か事を云ふかと突然王莽の首をチヨキンと刎落したさうで御坐います是れ即ち我身も徳もあひ癖に聖人の真似をした故で御坐いませう(ヒヤ)然れば真似と云ふもれハ氣の利のあひ事で一寸早いお話しが權助が旦那の真似をしてもしレハ何だんべエの一言で尻が割れ馬骨の立上りが奥様の真似をしてもし薩摩芋を噛るの一事でお里が顯はれ長鬚を捻繰て當世を談ずる豪傑の真似も兎角に滅金の剝やすく診察正午限りの表札を出してドクトルを真似ても患者が來あければ敷が露顯する等の矢張り鵜の真似をする鳥で誰も頼みも仕あひよ自分から赤恥をかくの御坐います(ヒヤ)また古い俗語も書生さんとの夢露まらぬ襟の半風子で今知れたトこれも貧書生が豪家の若旦那を真似て瞞着して居たと

ころ襟も半風子が伺匍て居たので遂に元の貧書生が發覺したと云ふ笑ひ
 草で御坐います(ヒヤ)ノウ)扱これ等の例に據て見ますると何して
 も真似の宜ろしくおいら成べく人真似の仕おい方が宜ろしう御坐いま
 す已に古人も先んずれば人を制し後るれば人又制せらると云はれまし
 が是れ即ち人真似を戒めたる金言で我々の常は胸の中にたゝみ置おけれ
 ばおらぬ事で御坐います(ヒヤ)それ然り然るゝ廣い世の中に兎角に
 人の真似をくりして人又制せられて平氣の人がイヤも御坐います殊に
 日本人同志の真似おら未だしもの事で御坐います自家の鮮より隣家の
 雑炊と云ふ物好で何でも西洋だ舶來だ西洋舶來とさへ云へば其事物の
 善惡の問はずして一から十まで西洋であければ夜も日も明ぬ有頂天の有
 様で日本の事物の悉く美味増お踏み倒しソレ西洋ヤレ西洋と恰も狐たぬ
 きよ魅されたる如く恰も鼻下長が愛婦に瞞着されるが如く事々物々これ
 の結構だ夫れも上等だと無暗矢鱈も西洋の真似さへすれば宜い様に心得

西洋人が悪いと云へば何處が悪いか其穿索も遂おいで悪いものと見做し
 西洋人が譽れば何處が好のだから曖昧おがら俄も其品が世に出て急直が
 騰るおどの實に感心お事事で即ち前も申せし如く後れて人に制せらる
 る氣味合もありますから少しく注意おかければ成りますまい(ヒヤ)去
 りとて一概も西洋の真似の行かぬおら日本の有合で問も合せるが宜ろし
 いと頑固説を主張する譯で御坐いません西洋だからと善き事おれば
 素より真似するも差支へなく又真似せねばおらぬ場合も有りますれども
 自家もある鮮を棄て隣家の雑炊を買て食ふ様お半狂乱を止めて貰ひ度と
 申すので御坐います(ヒヤ)総て何事に限らず人の真似をして尻も附て
 行どきの縦ひ五歩の速力あるにもせよ一足ささへ出たもの何處ま
 でも先へ行ますから後から出掛たもの先進者の二倍力おければ肩をお
 らべ又の先進者を追越す事お出来ない位の者で御坐いますから况してへ
 イくハイくと尻に附て先進者の真似をして居る日お何時まで立ッ

ても骨折り損の草臥儲けに違ひありません(ヒヤ)去りながら明治も己
 ゝ若盛りとありましたと連て右の眞似事も大なるに此邊にお氣が附れ追々
 とお目が見る様も爲りし實又結構せん万この上もあいな事で御坐います
 さま々く何して夢我夢中の方角たゝずで洋癖と云ふ一種の病を持って居
 られる先生達もあるとの事あれバ何卒この持病の先生達の眞似して宜い
 事の眞似をなさるも無益の事をよく嚙わけて此方の眞似をも先方へさせ
 る様もお心掛あり度もので御坐います(ヒヤ)殊に内地雜居とか云ふ事
 が初まる又附てその準備身構へをせねバ成りません内地雜居にある日
 かつて見ると是迄の眞似盡しでの中々不安心で御坐いますうら其の準備
 の仕あければ成りません併しあがら唯洋語を覺へさへすれば夫で事が濟
 と云ふ譯でもあしまた雜居の準備に洋語を覺へ様と構へ込だものが平假
 名附の獨脩書を誦誦してイエスノウウ位を片言交りて口眞似またあら
 とて是で何方からでも御坐れと度胸を据る譯も行ますまい併したゞが

カインとして指を咬へて見て居るよりの獨脩書でも誦誦して居る方が未
 だしも宜ろしけれども同じ準備の積りで心配するあらバ未だこの外も
 肝心な事があるで御坐います(ヒヤ)昔し太閤秀吉が朝鮮へ討入ると
 き又或る臣下の者が秀吉又向つて朝鮮へ行よ誰か彼の國の言葉又通じ
 た者を連れて行のあければ成りますまいと言上されたれば秀吉公のカラ
 と打笑つて馬鹿を云ふ+彼の國語を眞似あつても差支へない日本
 國語を以て彼も眞似させると云はれたさうで御坐います成やど太閤様
 の太閤様だけの事がありまして此一言を以ても人の眞似をする事が大嫌
 ひで人を制するに云ふ氣象があつた事を想ひ遣れます(ヒヤ)とい申す
 もの、此定本を以て今日又施すと云ふ道人の趣意で御坐いませんが先
 づ此位も度胸を据て居て萬事の見當を附ましたあらバ同じ眞似でも大い
 に利益する處があるだらう歎と存じましたま、面白くもあいな下手の長談
 議を博識先生の口眞似して饒舌りましたへい御退屈さま(大喝采)

○程よき説

道人が幼少の時漢學先生に就て中庸と云ふ講釋を聞ましが漢學の講釋の中々六ヶ敷もので御坐いまして一々その記臆する處を申し陳ますると丸で四書の示蒙を御聞に達する様な擲梅敷にありますから一寸その講釋を撮んで申し上げますが此中庸と云ふ事を分拆すると中の偏せず倚らずして過不及のあい事で庸の平常と云つてタイラお事ぢやさうで御坐いますッテ見ると是を普通の言葉に翻譯すると取も直さず程の宜ところと云ふ事で御坐いませう(謹聽)また論語の先進の篇に子貢と云ふ人が孔子に問て師(子張の名)と商(子夏の名)との孰らが賢れて居りますかと聞ましが左様いまして師の過たり商の及ばずと云はれましたスルと子貢が又問て左様いたしますと商よりの師の方が上手で御坐いますかと云ふと孔子嚙ッてナニコ過たのの矢ッ張り及ばないのも同じ事だと申された左様で御坐いますッテ見ると是の双方とも程宜ところへハマリ込まないので

早く云へば兩方とも駄目だと云ふ事で御坐いませう(ヒヤ)左れば程宜と云ふ事の中々六ヶ敷調子合のもので之を花で云つて見ませうから替でもさし開き過もせずと云ふ處で彼の六日の菖蒲十日の菊と云ふ諺の己に咲過た晚れたと云ふ事で御坐いませう又人間で云つて見ると脊高からず低うらす色白からず黒からず鼻高からず低からず口大きからず小きうらす眼も大きからず小きうらす頭髮黒からず赤ッ茶毛からず手足長からず短からず身体も餘り肥大らぬ様を瘦ッ轉かひ様を總て好頃加減の程宜い人を美人とか色男とか云ふので御坐いませう(ヒヤ)併し道人に云はせて見ると人間の利功で身体が健康でさへわれれば縦ひ五臟圓の看板の様も瘦ッ轉て骨と皮とで有らうとブツ／＼肥大ッて土左衛門の氷脹れの様も有らうと其様お事の何でも宜しう御坐いますか廣い世界れ中より隨ふん程宜く行かいで困る事が幾許も御坐います今この荒増を申して見ますれば親父の息子に小言を云ふの宜ろしけれど餘り毎日小言をかり云つて居

ると息子どのの其小言も慣て何とも思はさくあり小言を云はさければ親
 父を小馬鹿にするの愛ひあり藝妓買ひも餘り遣過れば身代を打潰し去
 りとて万更やらないのも頑固で行ず(ヒヤ)酒も少し位宜ろしけれど
 も猪口一杯や二杯での飲ぬ方が増しト云ッて圖歩六に酔拂へバ兎角も
 思苦尻が出来し口の禍ひの本と云ッたからッて啞者での役お立去りと
 て無暗に饒舌れば人々憎まれ人様よの叮嚀が宜からとて餘りペコ米
 搗ばつた見た様もお辭儀をかり仕て居れば諂諛と笑はれト云ッてお辭儀
 も仕さければ權式ばるとか人を見下るとり云ふ點から打こまれ牛肉の滋
 養もあると云へ見た斗りでの腹の足もあらずト云ッて四斤も五斤も一
 度食へバ胃部を損ね戸締の嚴重が宜ろしいと云へ餘り嚴重に過れば
 非常の時に吐ッ場も困るト云ッて緩くすれば泥坊の心配ありお三どのの
 山出しも困るが餘り氣の利いたのも油断が出来ず雷越しの金の持ぬと
 金を湯水の様お遣うのも餘り感心仕ないが金を持たず死んでも放さんと

云ふ伊勢屋主義も無論メあり杯と口から出放題を饒舌ると何時まで饒
 舌ッても種の盡せせんが何と致せ此世の中の事十の中で九分九りんま
 での帯もや短かし襷にや長しと云ふ一件で御坐います但其中でも各自ま
 自分の考へで程宜ところも處分の出来る事と出来さし事とが御座います
 れども大抵の自分で處分が出来さし事も御座いますまいから其處分の出
 来る丈の成べく程宜い處に願ひ度もので御坐います(ヒヤ)殊も醫者様
 の藥の加減おどの猶さら程宜い處に注意して貰ひませんければ夫れこそ
 飛でもさし事が出来いたしませず道人が或る醫者様も聞ました話しに吐根
 と云ふ藥の小量用もれば發汗劑にあり多量用もれば吐劑もある左様で御
 坐います道人の醫者の學問を致しませんから藥の講釋の誠に不得手で御
 坐います分量によつて功能の違ひますの唯この吐根をかりでの御坐
 いますまい若し果して他の藥も吐根と同様に分量によつて此の如く功能
 が違ふもので有りませすあらバ猶更のこと程宜い處の七加減ドッコイ水加

滅に注意して貰はねばなりません(ヒヤ)ト饒舌り回して來ると何して
も此所へ法律も是と同じ事でト饒舌り續けなければならぬ場合に運んで
來ましたが餘り長く饒舌ッて居ると尻尾が出ますのらマア程宜い處でお
仕舞にして置ませう(大喝采)

○自惚の說

世間の人の能く云ふ言草に自惚と梅毒氣の無い者の人間でないと云ひ又
一方から云ふに人として荷くも自惚の心を抱き一たび梅毒の患ひも罹
る者の人並の人間とある事が出来まいから孰れも皆不品行の片輪者だト
夫れ何故どうした譯で斯様に右の方での自惚と梅毒氣が無ければ人間で
まいと云ひ左の方での梅毒氣が有つて人間でまい杯と滅茶くよこれ
と叩き潰すので御坐いませうが實に人間をど我儘氣随ひしのない勝手
熱を吹もの無いでの御坐いませんか(ヒヤ)而して古來の學者先生達
のこの兩説の丸で反對で何方へ團扇を揚て宜いやら譯の分らぬ處から何

かして其眞理を發見したいと思ひ或ひの青筋を出し或ひのヤダソダを踏
み色々様々に腕を組めども未だに何方がどうとも確定しまい様子で御坐
います骨皮道人の梅毒氣タツプリ自惚十分を以て常道樂仲間中に鳴
り随分ひけを取らまい無類飛切りの人間で御坐いますから此爭論お就て
の無論に前説を兩肌ぬいで賛成するの一人で御坐います依て石部金吉の
人も鹿爪堅藏のお方も能く耳糞をホチツツてお聞取の程を願ひます(謹聽
謹聽)さて自惚と云ふ意味をホチツツて見ると自分で自分の必を信するの
厚きを云ので御坐いますから自惚と云ふもの人間に一日一刻も欠く可
あらざる者で御坐います既に自ら信するの心が有ますれば何様お六ケし
い事は遭遇しても困る事の御坐いません今その自惚の功能を申して見ま
すれば自ら我が手練手管の妙巧あるを信じてこれを沈々鴨鍋もしく肉
蒲團の上よ試みお客の膽玉をして有頂天外に飛ばしむるもの藝娼妓ら
ぬ不れの御利益で御坐いませう(ヒヤ)我學の福澤先生に肩を比べる事

の出来あくとも亦以て入學試験に應ずるも足んと無鐵炮に飛出せしに首尾よく級第して入學許可の恩命を蒙るものも是れ書生さんの自惚より得たる處の功德で御坐いませう其他著述家の我新著の必らず賣れるを信じて硯の凹み筆の坊主にあるのも願す商人の世辭の善のと直段の安いのを信じて品物を店頭にあらべ夫からまた新聞屋の配達の早さに於ける牛肉屋の肉の新鮮あるも於ける鳶の武に於ける狸の罌玉に於ける各自又自夫々の得意を特で世間の評判を取らんとする者として畢竟の自惚の二字に外あらぬで御座いませう(ヒヤ)また小紫が權八に殉するもの千の客中權八の男振に非ざれば以て間夫と爲す足すと云ふ小紫の自惚で御座います張琪の驚々も惚るもの天下の美人多けれども驚々の程善に非ざれば取て色女とするの甲斐なしと云ふ張琪の自惚で御座います(ヒヤ)併し此等の自惚の何でも宜とした處では是非とも自惚のかければあらぬと云ふ政治家で御座いますナせ政治家の自惚が無ければあらぬ

うと云ひますと政治家たるものが纒又一部分や半部の人不平不満を抱いて愚圖く云つたらとて夫がため我善しとする所の施政を見合す様事での政治家の資格上あまり感心しない次第で御座います(ヒヤ)ウ)故に自ら信じて是とする所の速かよこれを行ひ自ら信じて非とする所の斷然これを止め勇爲敢行一隅を顧みず能く大局を察する者として初て中原の鹿を獲るを得べし之を爲す者の誰ぞと云ひ唯々我が政略も自惚する者もあるので御座いませう骨皮道人の元來氣障治郎で御座いますして常に我の人並の人間だから我に惚る別嬪の無いで無のらうと唯自惚をかりを増長させて居りますが諸君も成べく自惚心を十倍にして何事も人又負ぬ様にか心掛あれと申す(喝采)

○思の說

よく論語が引合又出る様で御座いますが論語の季子の篇に孔子曰く君子又九ツの思ひあり視るに明を思ひ聽み聰を思ひ色を温を思ひ貌を恭

を思ひ言ひ忠を思ひ事ハ敬を思ひ疑ひハ問んと思ひ忍ぶハ難を思ひ得る
 を見てハ義を思ふト成やど君子でかくとも此位に思ッて居れば遣損ない
 や失敗ハ御座いますまい又思ひ中にあれば其色外ハ顯はると云ふ語も御
 座います又柿の本の人麻呂の歌ハ嶋のぐれ行ふね惜ぞおもふと有るより
 思ひだして百人一首を穿索て見ると先づ第一が身を盡しても逢んとぞ思
 ふその次ハものや思ふと人の問ふまでその次ハ人えれずこそ思ひそめし
 がその次ハひかしの物を思はざり是の次ハくだけて物を思ふこそ哉そ
 の次ハひるハ消つハ物をこそ思へその次ハあかくもがあと思ひける哉そ
 の次ハさしもまらじち燃る思ひをその次ハあらざらん此世の外ハ思ひで
 わその次ハ今いたし思ひ經かんとをかりをその次ハもる共よあはれと思
 へ山ざくらその次ハわれても末よ逢んとぞ思ふその次ハみだれて今朝ハ
 物をこそ思へその次ハおもひわび扱も命ハある物をその次ハ世の中ハ道
 こそあけれ思ひいるその次ハ夜もすがら物おもふ頃ハ明やらでその次ハ

「きげきとして月やハ物を思はする」その次ハよを思ふもるに物おもふ身ハ「あ
 ど」思ふと云ふ事を穿索した日にやハ百人首までさへ右の様に澤山ある
 位で御坐いますから其外ハ随ふん勘定の仕切れあい程あるだらうと思
 ひますが何に致せ人間と云ふ者ハ互ハ思ふたり思はれたりと思ふと
 云ふ縁を離れる事が出来あいのみ違ひありません（ヒヤ）先づ第一番
 に骨皮道人さどの別嬪を見るどア、云ふ別嬪を斯したら宜からうと思ひ
 鱧の蒲焼の香ハを嗅バア、喰ハ度と思ひこも被りの銘酒を見ればア、云
 ふ酒を一杯のみ度と思ひ綺麗着物を見ればア、云ふ美着物が着て見度
 とおもひ立派赤土藏造りや煉瓦造りの家屋を見ればア、云ふ立派赤家
 住で見度と思ひ芝居の話しを聞バ芝居を見度と思ひ相撲の話しを聞バ相
 撲を見度と思ひ義太夫も聞度と思ひ軽業も見度と思ひ花が咲ハ花が見度
 と思ひ雪が降バ雪見ハ仕度と思ひ何でも箇でも眼ハ見るもの鼻に嗅もの
 耳に聞もの口ハ喰ふもの一ツとして彼をア、またら是をコウえたらと思

之ぬ事の御坐いませんが扱人間万事塞翁の馬とやらで兎角と思ふやどの
 一割も實施する事が出来ません併し是れは道人一箇の事で御坐いますか
 ら敢て諸君と掛り合を附る譯での御坐いませんが諸君の腹の中に立入ッ
 て思ひを回らして見ても随ふん腹の中に色々の事を思ッて入らッしやる
 に違ひさい(ヒヤ)尤もお年寄り供衆お娘子さんお婆さんお若い衆みな
 夫々に思ひ方が違ひ又御身分に因ても違ひがわりませうが元來思ひと云
 ふものの喜怒哀樂善惡邪正何に附ても附て回るもので御坐いますから之
 を一々並べ立るより先づ心理學の講釋からおッ始め無ければありますま
 いが道人の其様も小入釜敷ことと眞平御免ですから道人の前申せし思ひ
 中にあらば其色外も顯はると云ふ文句に附て表から見え想像の出来るだ
 けを一寸申して見ませう(謹聽)エーと咳拂ひして見た處が何から申
 して上て宜いやらサツパリ分りませんが先づ何も箇も誤多交わして思ひ存
 分に饒舌りませすれば親の我子を馬鹿に仕度ないと思ひ娘に悪い虫を附た

く無いと思ふは拘らず息子の氣樂も遊び度と思ひ娘の互に思ひ思はるゝ
 約束があつて悪評を出すの親不孝あるべしと思ひお婆さんの後生を願ッ
 て臍線を出すの如何ある御了簡う分らさいと思ひお祭禮だあらとて思ひ
 思ひの綺羅を張る宜けれと後腹が痛まされれば宜がと思ひ雨が降つゞけ
 ば天氣よかれバ宜と思ひ天氣が續けば一雨ふれば宜と思ひ慾張先生の道
 を歩行おがらも金が落ちて居れば宜と思ひ乏貧人の借金取が来ければ宜
 と思ひ金貸の利息がシヨ玉取れバ宜と思ひ敷醫者の病人が来れば宜と
 思ひ商人の商賣が繁昌すれば宜と思ひ百姓の豊年あらバ宜と思ひ〇〇さ
 んの昇級すれば宜とおもひ遊者のお客が澤山あそばさば宜とおもひ娼妓の前
 借が無くおかれバ宜と思ひ新聞屋さんのお目玉を喰はねバ宜と思ひ演説先
 生の中止解散を命せられて困ると思ひ書生さんの早く學資が来れば宜
 と思ひ相撲取の勝度とおもひ俳優の評判が取度と思ひ落語家の笑はせ度
 とおもひ義太夫語り的美聲が出し度と思ひお三どんの薩摩芋が喰ひ度と

思ひ小僧の隙を見て遊び度とおもひ山師の一山めて度と思ひ誦誦家の旨
く胡麻化子たいたと思ひナット其様おみべラ〜 出放題を饒舌ッて居た處
が何も是と云ふ功能もあいな様に思ひますからモウ思ひ切て御仕舞にまや
うと思ひますが扱お仕舞に臨んで諸君お一言申し置ことが御坐います開
のまた何事いかある事いと申すと外の事でも御坐いませぬ元來何事でも
我心に思ふ通りにい逆も行かぬ者で御坐います古人の戒めは精神一た
び到らば何事か成らざらんと云ふ語も有りますから思ひ立て出来あいと
も限りませんが凡そ其人相當と云ふ事もありませぬ彼の螻蛄の斧を以
て龍車よ向ふと云ふ様も無鐵砲を思ひ立ぬ様また同じ思ひでも善と惡と
が有りますから其善惡を能く嚙分て思ひを定められたららば決して間違
が亦からうと思ひます處で道人の思ふ儘を述まして思ひの説と致しまし
た(喝采)

○迷ふ可りらぎ

此の迷ふと云ふ事自分の心を自分で支配する事が出来ぬ自分で斯と
見留が附かぬのでハテ東へ行たが宜からうのマテヨ夫れとも西へ行たが
宜かまらト色々思案して極りが附かぬのを迷ふと云ひまして彼の芝居
でする幽霊が迷ふた〜と云ふのも即ち地獄へも行極樂へも行けずと
途中でマゴ〜して居ると同ト事で御座います先づ幽霊の迷ひ話しの
姑らくお預りよして置まして切迷ふと云ふ事に至極よくあいな事で御座
います今その迷ひの例を茲に一ツ擔ぎ出してお話を致しませう(謹聽謹
聽或人が一疋の班猫を他所から貰つて來まして之お名をつけ様と思ひま
した彼れも行ぬ是れも駄目だと色々迷ふて治りが附ませんから仕方
あしよ唯猫よ〜と呼で居りますと或人が來て云ふに猫を呼ぶよた
猫よ〜で可笑いから何とか名を附たら宜からう夫れに就てハ獸の中
で一番狂いの虎だから虎と名を附たら宜からうと勸よ任せて虎と名を
附て虎々と呼んで居ると又或人の云ふにハイッラ虎が猛威からッて龍よ

やア難敵かいから龍としたら宜からうと云ふので夫れも左様かと思ひ夫
 れから龍々と呼んで居ると又ある人が来て云ふのイッラ龍が猛威から
 ッて雲が無けれやア龍も何する事が出来かいから雲としたら宜からうと
 云ふので夫れも左様だと夫れから雲々と呼んで居ると又ある人が来て云
 ふのに雲がイッラさついついからって風も吹かれりやア吹飛されて仕舞のら
 風とするが宜と云ふので成程これも一理あると思ひ夫れから風々と呼ん
 で居ると又ある人が来て云ふのイッラ風が強いって障子を締めやア這
 入る事が出来ないから障子とするが宜と云ふので成程ど是れも尤もだと
 思ひ夫れのら障子くと呼んで居るとまた或人が来てイッラ障子がさつ
 いからって鼠も遭ちやア噛られるから鼠とするが宜と云はれて飼主の初
 めて氣がつきナンダ馬鹿くしい鼠より強いやア猫だら矢張り元の猫
 が宜かつたのとトウく猫よく立戻つたと云ふ話しが御坐います(ヒヤ
 ヒヤ)この話しに誠な馬鹿げた事柄の様で御坐います物事に能く迷ひ確

定の附かかい人よの宜い戒めで御座います何故よい戒めかと申しますと
 世間にこの猫よくから初まつて色々にマゴつき其末の矢ッ張り猫よく
 に立戻る人がイッラもある様と思ひますれば御座います扱芝居の迷ふ
 たくの観音經の片ッ端を見せて怨敵退散と一聲吐鳴れば夫れで迷ひ主
 も成佛すれども生た人間の中々そんな手輕き事での成佛否迷ひが止まら
 かいにの實も困ります(ヒヤ)而してこの迷ひと云ふ奴の何様か處から
 飛込んで来るかと云ふと即ち腹の中の極りが附て居かい處のら其隙間を
 ねらって迷ひの玉に押込まれ種々様々に引掻回されるので御座います併
 しイッラ引掻回されても害とあらかい者あら宜ろしいが害がかい處での
 かい大變な妨害をする者で御座いますから迷ひ病お取附れて居らるゝ人
 人の宜く注意をせなければなりません殊も書生さんの迷ひの猶更の事で御
 座いまして例へば國許を出る時の法律學を研究する積りありしに東京へ
 来ると俄に經濟學も變じ經濟學がまだ何様か者やら碌々味の分らぬ中よ

人々政治學が宜と云ふと又ハ政治學又變返り夫から又法律學に立戻るや
 ど、年が年中マゴくして居るうち月日のマゴつかあいで眞直に立ち
 愚圖くする中モウ三年五年と經過て初めて眼がさめア、初めからは
 斯すれバモウ今時分の卒業して威張ツて居るよト後悔した處が死んだ子
 の歳勘定でボカンとする人も往々ある左様で御座いますすが是等の人の第
 一親よ對して不孝第二にハ自分の不利益第三に我々に不幸を與へるの原
 素で御座います(ヒヤ)尤も商人百姓其他の者に致せ迷ふて宜いと云ふ事
 の御座いませんけれども好しや商人百姓その他者が迷ふとも是ハ唯一
 箇一身の不幸又止まるばかりで左程社會の進歩如何んハ關係を起しませ
 んから早くヤせば何でも宜ろしい様おもひ、彼の一藝一技を以て社會に
 立んとする人々の我々の尤も末頼母しく思ふ所イナ我々の末頼母しく思
 ふのみならず是等の人々の自ら開化の先導者とあるべき人でありますれ
 バ國の爲め實又惜むべき事で御座います(ヒヤ)されバ此開化の先導者

とある書生諸君の宜しく確乎不拔の目的をたて、他人の甘言又迷はず他
 人の爲めに我精神を支配せられず仙事にまれ初め目的とせし處の業を遂
 げ而して社會のため一肌脱で我々の迷ひを怨敵退散と氷解せしめられん
 事を偏よお願ひ申します(大喝采)

○茶代廢すべき説

櫻花の爛熳と咲そるハ鶯鳥のホウ法華經と嘲るの時紳士豪商の扱ひき道
 人の様も貧乏書生の隅田の堤み出掛るにも車にも乗ず舟も泛べずたゞボ
 ヲリと花間を徘徊し兩脚の勞を覺へるよ及んで彼の菱籠張の野店に
 腰を掛けて休息するとき二八の姉さんが澁茶を一杯持て来て旦那茶を御
 喫りあさいト差出すをグット一杯飲んで咽を濡し其立去るときよ姉さん
 お茶代だよト一錢銅貨を二ツ三ツ放り出す是れ即ちお茶代で御座いまし
 て道人の廢すべしと云ふお茶代のこのお茶代の事での御座いませんまた
 炎熱赫々金石燦々の夏日よ上野公園に暑を避るとき有髯高帽の先生の姑

らく措き道人の如き無一物の彼所へ蹲居り此所に起て二本の瘦脚も躡を
 覺へる頃る茶亭の椽臺に腰をかけて休息するとき四五の年増が櫻湯を一
 杯もつて来て且那お湯をお喚りあさいと差出すをグット一杯飲で咽を濕
 し其處を立去る時に姉さんお茶代だよと一錢の銅貨を二ツ三ツ放り出す
 是た即ちお茶代で御坐いまして道人の廢すべしと云ふお茶代はこのお茶
 代での御坐いません其他明神山愛宕山あどで茶代を取を以て業とするも
 の澤山ありまして甚だ譯の解らぬ商賣の様で御坐いますれども是の他
 に是と云ふ利徳も亦く又此處に体むもの多少疲勞を助ける譯ですから
 茶代を與へるの恰も席料を拂ふと見做せば之を取り之を拂ふも敢て差支
 へない事で御座います然れば道人の廢すべき茶代とい何様お茶代かと申
 せば即ち旅籠屋の茶代で御座います謹聴く或人が道人又向つて物知顔
 して講釋するを聞きましたに其人曰く茶代の出し方又上手と下手とありて
 旅慣れた人と旅慣ぬ人の茶代の出し方に因て知れる位あり而して其區別の

何處もあるかと云ふと旅慣れたもの旅籠屋へ着ると直に茶代を出すから旅
 籠屋でも人情として一から十まで能く氣を附て呉れまた此方でも總ての
 事と都合が宜い然るに旅慣れぬ人の出立の朝に臨んで茶代を出すから
 其茶代の機能が見えないナセ機能が見えぬかといと云ふと先方でも茶代を
 呉る人か呉ぬ人か貰つて見かけりや分らぬらマア宜加減に取扱つ
 て置くといふ様の場合がある故又着早々に茶代を出すを生た茶代といひ
 旅上手といふ朝出立の時又茶代を出すを死んだ茶代といひ旅下手といふ
 と道人この講釋を聞いて成程く御尤も賛成くと申す處が却て反對の考
 へを惹起し此奴アお茶代を丸切り廢して仕舞つた方が宜からうとの思ひ
 を増ました(ヒヤ)夫れ旅籠屋と云ふもの旅人をして宿泊せしめ旅人
 をして飲食起臥又差支へなからしむるの營業で御坐いますから夫れ相當
 の宿泊料および飲食料もある譯で御坐います而して此宿泊料および飲食
 料ある以上の縦ひ一夜泊りの客としろ通り一遍の人に致せ丁寧に取り扱ひ

鄭重に待遇するの素より當然の事で御坐ませう(ヒヤ)然るお世間の習慣として別茶代と云ふものあり此茶代の多少は因て客人を甲乙に分るのみならず茶代を出さなければ碌玉の挨拶もせず茶代を出せば閻魔面が急な蛭子顔に變化しソレお茶をヤレお菓子をと初めて客人の取扱ひを爲るとい誠に飛でもお大間違ひでの御坐いませんか併しおがら此の如き大間違ひに立至りましたのの旅籠屋の罪で御坐いませうの道人の思ふよ決して是の旅籠屋の罪でのなく客人の方より自ら其種子を蒔き其弊害を作出した者と認定致しますませければ己も前にも申しました道り旅籠屋の定則の宿泊料と飲食料を拂ひさへすれば先方の利益の其中は含有て居る譯ゆる縦ひ別段の世話料を出さなくとも鄭重なる取扱ひを爲べきい勿論殊も先方からイッラくの世話料を呉と請求する筈も無ければ唯客人の旅籠代さへ拂へば夫で宜ものを特別の待遇を受んが爲め茶代との何とか手當金を出すのら旅籠屋の方でも茶代を貰った人も貰はない人も同じ

様に取扱ふ譯にも行かざるより終りの目今の有様に立至りたるもので有りまするからは一も二もあく茶代と云ふ手當金を廢して仕舞ひさへすれば有鬻高帽的の且那樣も無鬻低帽の我々社會も同等の客人とあり又薄情的の取扱ひも免かるゝに違ひありませんから此奴ア一ばん先方のナト帳合がクルヒませうが旅籠屋のお茶代は限りお廢止として如何で御座いませう(喝采)

○隣の糠味噌

俚諺に隣の糠味噌と云ふ事が御座いますは是の我家の糠味噌を不味として隣の糠味噌を滋味と思ふ人の腹の中をエグツたもので御座います扱わが家の糠味噌の不味とし隣の糠味噌を滋味と思ふの人情は常とい申しおがら人の根性もまた戯痴おももので御座いませんか(ヒヤ)元來ぬか味噌と云ふもの自家の糠味噌も隣の糠味噌も固より同じ糠味噌で御坐いまして隣の糠味噌だからとて蒲鋒の味があるよと云ふ譯もあし

又奈良漬の旨味もありません。また隣の糠味噌の旨いとするも高の知れた話して御坐います。去れども人間の根性の戯痴ちもので動もすれ。糠味噌主義を出し立派ある女房を措て垢染たるお三どんに掛り合を附て一口に頬を焼くものも御坐います。がナントまた物好き奴子さんも有るもので。御坐いせんか(ヒヤ)近頃東京の遊廓で、關西の別嬪が大層流行いたしまして。芳原根津の妓樓に、皆大坂西京の女郎を抱へ。い樓のちくお客樓も登れば必ず先づ京坂の別嬪が居るか。何だかと問ひ若し上方の別嬪の居らぬと云い、不興の顔色して去るものが多い處から、妓樓の皆上方の女郎を仕入れて、冶郎の御注文に應ずると云ふ話して御坐います。が上方女郎とさへ云へば皆賣口が宜い。是のまた奇妙事での御坐いませんか。蓋し上方の女郎乗の情が、ツツプリアるさか。御客の惚るも無理ぢや。オマヘンとする。何だか道人の未だ其花に接しません。うら其真味を知る事が出来せん。(ノウ)上方の女郎ばうり情があつて、關東の女郎の皆

情が、いと云ふ次第柄も御座います。すまい。縦ひ上方だ。らとて、關東だからとて、到底ところの同じ糠味噌でエへ、ハオホ、と愛嬌を作つて、冶郎を誑すのが商賣で御座います。から口に温々たる情言を粧へども、女郎の則ち女郎で東西の違ひあれば、と何れも別段變つた處もありません。左れども上方女郎と云へば、情誼の厚い様に思ふ。矢張り隣の糠味噌と同一理で、只珍らしいと云ふまでの事で御座いませう。(ヒヤ)夫れ然り然るに、我同胞の諸君の中に、唯々女郎買や糠味噌に限らず、何れも就ても此情がある様で御座います。が能く隣の糠味噌と我家の糠味噌とを喰比べて、彼の赤髯唐人とさへ云へば、マトロス然たる人も、不凡の智慧ありと思ふて、これに惚込み、黒髯先生とさへ云へば、鱒の子分平たるものも、一世の英雄ならんと之を恐れ、何々學士と冠する者の、必らず大學者の様も、思ふて震へこみ、錢取る面の名を聞ば、必らず皆大金持あるべしと羨む等、たい其名を聞き、其容体を見れば、かりで浦山敷おも、糠味噌了簡を出し給ふナと申す(喝采)

○成べく方言を去るべし

道人の外國の事少しも存じませんが凡そ日本やど言葉の區々として方言の夥多しきの恐らく他に比類なからうと存じます而して其方言の重立たるもの世間の笑ひ草又傳ふる所の大坂サカイに江戸ベラボウ長崎ハツチン肥後ナイの四種で御座いますれども諺に方言の國の手形と云ふ位で御座いますから其細目に涉つて悉く是が取調を仕ましたあらば迎も一朝一夕に勘定の出来がたきの勿論よしんば之を百千板の紙みかさ七日七晩ノベツとお饒舌り仕ましたからとて所謂骨をり損の草臥まうけで夫程の利益も無さ左様に思ひまするら其細目の取調べの姑くおき只この論題に必要ある廉ばかりを擧て申しませう(謹聴)ある國でい出ると云ふことゝ出来たと云ふ事が丸で間違つて居りましたお月様の出来たが圓子が出ない杯と云ふ處もある左様で御座います又たある國でいヒとフが間違つて居りましたヒカッハ(深川)のヒドゥ(不動)様へ行たらフト(人)が込ん

で居て云々と云ふ處もあり又ある國でいハとシとが丸で頓珍閑に爲て居りました猪喰つた報ひをスシ喰つた報ひ云々と云ふ處もあり又ある國でいヒとエトヌとノとが間違つて居て犬も歩行バ棒も當るをエノも歩行バ云々と云ふ處もありとの事で御座います(ヒヤ)さて右の様を妙妙語氣も出ますから五十音の發音もこれ又随つて妙妙選びに立至りアエウイオと發音するとの實に困つた次第で御座います尤も東京の方言もヒとシの間違ひの外七分通り右と同一種の間違ひが多くありまして疾疥癬をヒツンセンと麗々しく看板又顯はした者もありましたが近頃の大ぬよこの方言を一變し下等社會の論外として中等以上の人々又至つての餘程この邊に注意せらるゝ様にありしに實に結構千万の事で御座ます(ヒヤ)而してこの東京人が間違ひを正すに注意するも拘らず彼の開化の先導者たる學者先生に於て却つて我故郷の手形を依然として固守しこれを文字又顯はすに矢張り右の方言を全く脱せざる者が御座います今その適例

を求むるよ一ばん手早きの近來流行の小説を一讀すれば之の何國の人
 れの何處の先生と一目瞭然する位で御坐います又新聞紙あども時とし
 ての人を眼下に見下すとか分明開化あどもクワとカとクワンとカントを
 無茶苦茶誤多交の傍訓を拜見する事も御坐います(ヒヤ)夫れ小説の筆
 頭が如何に達者ありとて柳橋の藝妓がヒカハのヒドウ様とかエノも歩
 行バとか妙き言葉遣ふに至つての小説の興味薄きのみならず誠に抱腹
 堪ざる次第で御座います又新聞の雜報文句が如何に巧妙なればとてシ
 トをクワン下に見下すとか文明クワイカあどもては是また抱腹堪ざる
 次第で御座いますれば諸君の中もし我必に問て道人の理屈を賛成し給は
 り宜しく考一考せられん事と敢て願ひます(大喝采)

○仕合せとて安心すべからず

諸君よ仕合せとい猶幸ひと云ふも同じ事で御坐います故に幸福の人と呼
 んで仕合せの人とい不幸の人を呼んで不仕合せの人といひます蓋し幸

福と仕合せとい文字違へども其意味の同じ事で御座います之も因て是を
 觀れば仕合せの人間の常に望む所で其中の愉快の事の勿論いろく様
 様の樂事を含有して居るで御坐いませう(ヒヤ)道人あどの會て芳原の
 別嬪も惚られ其仕送り金も由て贅澤を爲せしは實に仕合せあり然れども
 之が爲に梅毒も感染しッガくとある是れ不仕合せあり今茲に二百圓の
 遺失金を拾ひ十圓のお禮金を頂戴したの仕合せあり然れども朋友の爲に
 吉原に引張り行かれ三圓五十錢の足前を爲す是れ不仕合せあり慾張り婆
 アが小娘を養ふて金春も藝者屋を開き小娘の前尻を賣て左り團扇の生
 活を爲すの仕合せなり然るに何ぞ圓らん此むすめが色男を拵へ婆アを置
 去りにして逃亡すれば婆アの俄に不仕合せあり虎列刺病流行のとき敷井
 毒庵老が夥多の石炭酸を仕込み大金を儲けたるの仕合せあり然れども遂
 に虎列刺病も取附られて死ねば是れ不仕合せあり裏店八公の娘が瑤の興
 も乗り色野助平先生の種を孕みして八公の大喜こびて近所合壁の狼連

中は威張ッて曰くベランメイ見て呉れ聞て呉れ斯見えても今に馬車に乗
てユイイ〜と歩行のたト聞て狼連中の皆赤羨んで任合せと爲す既にし
て十月月も満るもオギヤアと飛出さす娘も自分おがら大に怪みこれを
醫者よ見せれば醫者の曰く是の懷妊でいはい脹満だと八公これを聞き落
膽するの是れ八公の不任合せあり○族様の日本第一等の御任合せ者あり
然れども其中より頭に馬の字を戴く御方ありて猫や狐の爲は公債證書を
奪れて仕舞ひ遂は懲戒令の御厄介とある是れ親族一門の不任合せあり娼
妓の身受を爲すもの日本第一の馬鹿助にてこれが父母妻子たる者の不
任合せあり然れども泥足を洗ひ富家の細君とある者の任合せあり杯と並
べて見ると任合せも當にあらす不任合せとて歎くも及ばぬ様に思ひま
す左れば諸君達も不任合せありとて苦世〜心配仕あさんお又任合せあ
りとて安心も仕あさんお(大喝采)

○浮世の回り燈籠の如し

今日春去るかと思へば明日夏が来る秋が来たと思ふ間もかく冬が立て仕
舞ひ雁の燕と代り月の花と入交り忽ち此れ忽ち彼れ舊逝て新來る新陳交
代前後相あらたまるの是れ天然自然の理で御坐います(ヒヤ〜)故に今日
盛んあるもの明日の忽ち衰へる事あり今これが適例を擧て見ますれば平
家の一門が一朝の榮華を極めて源氏の一類の片時の落魄お至るも氣運一
轉して平家の壇の浦に亡び源氏の鎌倉に起り北條九代の盛んある忽ち足
利十五代の衰ふるあり三好暫らく榮華を夢みて織田僅か又隆盛を覺ゆ豊
臣の驕奢も一時よして徳川の泰平を致し明治の初年に關東の軍敗れて京
家の兵勝を占め武士の饑餓又悲んで公卿の綾羅を飾り旗元の車を挽て用
達の馬も乗り御武家様の團子屋とありて素町人の月給取とあり大名の奥
様のお三どんと同格よ至り芋屋のお娘の夫人の位よ上り今日三味線を枕
にする藝者も明朝の瑤の興よ乗るの奥様とあり昔し芳原の盛んある頃の
花魁よ王侯の權あり故に仙臺公その情を遂す紀文の名天下よ轟く是を以

て名を馳せ譽を求むる者の争ふて花街に遊び金銀を雨ふらして酒池肉林の宴を張れり然るに明治の後ハ藝者が代つて權を執り貴介公子が馬を章臺楊柳の路ハ繋ぎ田夫野人の三文治郎がお金次第で頗る別嬪を擁し僅かハ甚九都々一を彈得る者常ハ王侯百城の養ひを受くその不ハ俳優が時を得て河原乞食の籍を脱して神宮教導職の位ハ上る然れども其榮久しからず芝居小屋ハ蝙蝠の巢を作り木戸口の蜘蛛の網を張る是に於て力士この時ハ乗じて起り一たび天覽の幸榮を蒙つてより湯屋の話しも床店の話しも相撲の評判とある然れども其事久しからず近頃に至り演劇改良論起りて力士の勢ハ弱くなり俳優の權又ハ強く或ハ束髮ハ一時の勢ハ熾んちるも生意氣のお轉變ものむかりで堅氣のお嬢様ハ矢張り島田鬘ハ結び洋服の説小學校ハ及んで羽織袴の間拔じみろこの洋學盛ハあつて朱喜章句の漢學おとろへたるも此節また少しく呼吸を吹返したり杯と何だか分らぬ寐言を並べて見ますれば昔しも今も浮世の同じ事で恰ど回り燈籠に違

ひありません故ハ何事も盛んおればとて夫を恃みハ仕て居てハ衰へた時に落膽しますすら其落膽の豫防ハ必ず盛んあるときハ仕て置やうに心掛るが第一で御坐いませう(大喝采)

○圍碁の流行ハ泰平の餘裕なるか

諸君ハ圍碁も骰具なり將碁も骰弄具で御坐います而して二人ハ盤面ハ對して勝敗を決し雌雄を争ふハ其理同じ事で御坐います但碁と將碁との其道具が違ひますのら随つて其技術も違ひます(謹聽)さて將碁ハ諸君も御存じの通り一局の盤面を二部ハ分ち双方に各々一個の王様が有つて夫れから其傍ハ居並ぶ金銀飛車角行桂香の諸大將もまた各々に其職があつて王様を保護し双方の軍勢軍備の整ふを待てそれより互ハ隙を覗つて敵を責め機を見て勇を鼓し一進一退虚々實々勝敗を目前ハ決す是れ將碁の妙味で恰も國と國との戦争の様で御坐います故ハ將碁ハ有に起つて無に終るの技と云つても宜いで御坐いませう而して碁ハこの將碁と丸

で違ッて居りましたして一局を三百六十一目に分つむりりて王様もかく大將もかく唯黒と白とを以て敵と味方とを區別いたします然して其戦争の工合の何様か搦梅敷かといふと先づ白が東の方を奪へば黒の西の方を取り黒が虚に乗じて闖入すれば白もまた勢ひを得て蹂躪し縦横の處を定めず左右その地を同じふせず或ひの死し或ひの活あるひの勝あるひの敗れ而して其掠奪の多きものを勝とし其掠奪の少きものを負とする是れ圍碁の妙味で御坐いますして恰も虎將と龍帥とが邦國を無王の地と争ふと同じ様で御坐います故に圍碁の無と起ッて有に終る技と云ッても宜いで御坐いますせう(ヒヤ)さて將碁と圍碁との斯様か次第の者で御坐いますから其技術の違ッて居りましたして其樂みの同じ事で御坐いますせう然るお世の人の將碁を疎じて圍碁を就の傾きあるの何故あるのと云ふも他なし其品格の同じらざるに依ては御坐いますせう今その品格を樂器と譬れば將碁の三味線の如く圍碁の琴の如くで御坐います(ヒヤ)諸君試みに見られ

よ街頭塵揚るところも車夫馬丁が臂を張り膝を接して將碁の盤面を對するの見ますれども未だ此の如き下等社會が腕まくりして圍碁の局面を對するを見た事御坐いません是れお裏店の小娘が破れ三味線を一ツ電の前よペコン〜遣かすを見ますれども未だ此の如きお茶ッ非娘がコロリンヤンの琴を弾ずるを見た事の無いと同じ事で御坐いますから圍碁の上位へ行はれて下等へ行はれぬの成程と合點が参ります(ヒヤ)夫れ然り然るも近年の圍碁の流行する日一日より盛んも月一月より甚だしく上の貴顯紳士より下の小商賈に至る迄黑白を争ふて樂みと爲すより近來の都下俄も圍碁の小集所が出来し又一雨毎に其數を増加するに至り而して其席料の兩三年前まで一人三錢を通例とせしに今日の其席料も一定ならず或ひの二錢五厘あるあり或ひの二錢あるあり甚だ敷に至ッて一錢あるあり而して其圍碁小集所の大抵みも大繁昌を極むるとい誠と結構千萬の事で御坐います(ノウ)ヒヤ〜何故にこれを結構だと申す

かと云は、曰く人々が泰平に嘯ぶき圍碁を樂むの餘裕を得れば、御坐います若しそれ五穀豊からず金融平を得ず百姓の田圃に泣き商人の店頭に悲むの不幸あらば、縦ひ一錢を投じて圍碁を樂まふと思つても、樂む事の出來あいで御坐いませう故に、今日の圍碁流行の泰平の現象と云ふも、敢てコヤ附け理屈で御坐いますすまい併し、泰平の現象といふ云へ彼の寐惚先生の言の如く、下手の横好で食時を忘れ我肝要ある家業を打捨て置て圍碁に夢中とある様も人の素より論外の漂碌玉で御坐いますから、道人の決して相手に致しません(大喝采)

○僥倖の説

僥倖と仕合せといふ一寸似寄て居る様で大變を違ひで御坐います今その區別を申して見ませう、あゝ僥倖といふ俗に云ふコボレ幸ひで御坐いまして自分が當にも何にも仕あいにフツ運勢が舞ひ込んで來たと、或ひの思ひも寄らぬ幸福が、出拔れ飛込んで來るおど、是れ即ち僥倖で御坐います仕合せ

せの是と丸で違つて別嬪を口説バ別嬪が直にウソと云ひ越中懐鼻揮を掛るも向ふあら外れあひ杯これを仕合せと云ひます故に仕合せの望むべく僥倖の望む可からざる事で御坐います(ヒヤ)然るに近來の僥倖を望むもの日一日より多く寐ても僥倖を得んと欲し轉んでも僥倖を得んと欲し而して偶々八ッ當りで僥倖を得るものあれば、人羨んで仕合せ者だ杯と云ふ處から只今での僥倖と仕合せとが混交して滅茶苦茶とありまして人よよると僥倖と仕合せとの何處が何の位ちがふか杯と是が講釋を求むる有様で御坐いますから、道人の是より僥倖の恃む可からざる所謂因縁を手短まか話し致しませう(應聽)よく落語家の前坐の云ふ話し、お曰く寒風凜凜飛雪粉々チツト夫れでの餘り固過るが兎に角に身の凍へて肌は粟粒を生ずると云ふ寒天でオ、是りや寒いコリヤたまふんと震へて居ると恰かも好し隣家から銘酒が到來したか、是れは結構ステキ、併し下物のあゝいよ困つたと思つて居ると何處から遣て來たか二三羽の鴨が各自葱

を脊負て来て目の前でお辭儀をするから此奴ア豪氣だと急にこれを料理して且つ飲み且つ食ッてア、宜心持だサア是から寝やうと思ふときに絶世の美人ガドル函を擔いで来て是非同衾して呉れとの依頼に任せこれと同衾する砌り柵の上うら牡丹餅が落ちて来たから二人でこの牡丹餅を食ひながら寝たト是れ眞に僥倖中の僥倖で御坐いましたして決して仕合せでの御坐いませぬ(ヒヤ)然れども斯様お僥倖のイクラ望んでも實際得べからざる事で御坐いますから道人も敢て心配の致しませんガ實際僥倖を得て自ら仕合せと思ひ眞の仕合せ者を壓倒するに至つての道人もこれを悪い奴と云はざるを得ざる次第イナ悪い奴と云はんよりの寧ろ憐むべき奴で御坐います今その一二例を擧て見ますれば彼の三百猫が如何なる調子合ひ又因てか旨く鼻毛を算へて手人力又乗の僥倖を得その僥倖おひく又増長して動もすれば眞の仕合せ者の奥様を大尻の下に敷んとす是れ僥倖の一害で御坐いますすまた彼の諂諛先生の如何なる摠梅敷に因てか旨く胡

麻を摺りおふせ急に金時計をヒカ附せるの僥倖を得その僥倖おひく増長して動もすれば眞正の仕合せ者を吹飛さんとす是れ僥倖の一害で御坐います(ヒヤ)然れども滅金の當みならず金箔の剝やすく右の三百猫がイクラ大尻を振回すとも一朝旦那の秋風起れば嫌も應もかく元の空阿彌とあり再び其日ぐらしの巢に潜り込んで薩摩芋を噛るの外おし是又於てり僥倖の恃む可あらざる事初めて知れ眞の仕合せ奥様の光りが出るで御坐いませう又諂諛先生がイクラ虎の皮を被るも一朝波風立てば是非あく病氣云々の書を差出し泣々齧齧を剃落して巻煙草の内職でも爲るの外おし是に於てか僥倖の恃む可うらざる事明かよして眞正の仕合せもの大威張で御坐います(ヒヤ)そのやか僥倖の恃む可からざる者を一束ねにして之を云へば山師の濡手で粟を握むの僥倖を恃んで身代を棒振り空米相場師の三買以四遣の僥倖を恃んで此峰とらず又悲み書生の試験の僥倖を恃んで落第に歎じ舊弊親父の商賣繁昌の僥倖を恃んで頻又大神宮様を

拜み慾張男の無盡の僥倖を恃んで鼠小僧の墓を缺き無鉄砲の馬鹿治郎の花札の僥倖を恃んで警察官のお手敷を掛け娼妓の無心金の僥倖を恃んで色男も繼込み私窩的の薄暗き僥倖を恃んで却って罰金を取らるゝ等社會一般何事も限らず僥倖を恃むものを算ふれば中々一朝一夕又言ひ盡す事出来ません元來僥倖を恃みまする者の縦ひ其始めの都合が宜しきよせよ早いか晚いの尻の剝る者でありますから諸君の此劍呑ある僥倖を恃まずして真正の仕合せを恃みに成さる方が大丈夫で御坐いませう(大喝采)

○藝娼妓を改革すべき説

方今朝野の事大と云く小と云く一事一物あんでも艱でも悉く改革の氣運も傾きまして甲の風俗を改革せねば行ぬと云ひ乙の衣服を改革せねば行ぬと云ひ丙の飲食を改革せねば行ぬと云ひ丁の家屋を改革せねば行ぬと云ひ戊の言語を改革せねば行ぬと云ひ己の文字を改革せねば行ぬと云ひ或ひの演劇の改革あるひの落語の改革その外何に附ても改革と云はねば

夜も日も明ぬ時節とあり頭の素徹邊のト足の爪の先まで改革く」と評判高く其癖これが改革で立派な出来あがったと云ふ代物も碌々拜見せぬ様で御坐います何が何に致せ小八釜しい時節で御坐いませんか(ヒヤク)夫れ又附まして道人も人真似での御坐いませんが一ツ新案の改革説を擔ぎ出して適れ首唱者と譽られ様と飛でも無い了簡を引起しましたシテ其新案の改革説の如何ある計畫かと申すと即ち藝者と娼妓の改革で御坐います斯く云ひ初めると氣早い人の必ず呑込顔にて云はれんとす道人の改革説に至極尤もかり藝妓の意氣よして愛嬌を含み且ツ口説バ靡くと云ふ文句を實行する者も改革する積りか娼妓の柔順よして嫵致よく且つ情味々ツプリよて無暗お客を振らざる者に改革する積りかト道人これよ答へて曰く何してく夫れの道人の了簡との丸で反對で御坐る早呑込みの先生達よ先づ道人の一應説き終るを待て何とでも仰しやるべし(謹聴)諸君よ此の改革説の趣旨を述るよ先づ第一に藝娼妓の職務の如何ある者か

を明かにするが必要と考へますうら一寸これを手短かゝ申し述べませう扱
て藝妓ある者の客の所望も随つて或ひの舞ひ或ひの踊り或ひの三味線を
弾き或ひの歌を謡ひて酒席の興を帯ける者もて之を早く云へば人の愉快
を帯ける器械で御坐います又娼妓ある者の所謂お寐間の伽にしてこれを
語を換て申せば一夜の妻で御坐います故にこの藝妓の役目いたゞ客人
をして浮れて樂ましめ獨身ものをして浩然の氣を養はしめ足るもので
御坐います(ヒヤ)夫れ藝妓の職分いたゞ客人をして浮れて樂ましめ
獨身ものをして浩然の氣を養はしめて足るものと致しますれば人をして
沈溺せしめ家庫を棒に振らしむるの其職分も對しても決して本意で御
坐いますまいと存じます然るも藝妓の往昔も現今も遊客をして沈溺せ
しめ産を破り身を失ふの道具と爲て居りますが實も困つた次第で御座
います(ヒヤ)然れども古來の弊あるを知つて遂に之を去る事
が出来ません否啻も之を去る事が出来まいをありで無く却つて其害を増

す様に思はれますが是の其原を尋ねずして徒らに其末を探るゝらで御座
います抑々遊客の沈溺する者の其藝と其情に非ずして唯その嫖致の美
醜に在ますから其害を防がんとするに藝妓をして傾國傾城の姿色無
からしめば宜しいで御座います諸君試み思はれよ楊玉環をして傾國
の色無からしめば皇帝も險蜀に困ます内侍をして羞花の顔あらざしめ
ば中將も兵機を誤らざるあり石崇の緑珠の爲に其身を亡ひ判官の顔世の
ためも其家を滅す之も因て是を觀も人をして沈溺せしむるもの傾國傾
城の姿色もあり心をして盪搖せしむるもの妖美麗艶の容色もあるに相
違御坐いません(ヒヤ)故も藝妓いたゞ三味線を弾て謡ひ扇を以て踊り
酒席の興を帯くれれば足れり娼妓の獨身ものをして浩然の氣を養はしめ一
夜の妻とあれれば足れりとあさば之に附屬する姿色の如き何でも宜敷こ
とも成べく左の箇條も合格する者を以て藝妓と爲す様も改革すべし
一頭の禿たる藥罐の如きもれ

- 一 頭髪ハ獅子の如く縮れたるもの
- 一 片目にして累の如きもの
- 一 鼻の低き甘酒屋のお龜の如きもの
- 一 顔の恰好唐那子の如きもの
- 一 頤の長さこと長芋の如きもの
- 一 口の大ひある鰐口の如きもの
- 一 痘痕澤山にして輕石の如く食麵包の切口の如きもの
- 一 口と腋の下の臭くして人の鼻を突透すもの
- 一 腕の大ひさ松薪の如きもの
- 一 臀の大ひさ大道白と比べて引を取らざるもの
- 一 手足の大ひさ杵の如くにして武骨猪氣あるもの
- 一 跛脚又して六本指のもの
- 一 突胸又ハ踠躄のもの

扱右の様を醜惡の婦女を撰抜して藝娼妓と致しますれば彼の都々一に云ふ連添ふ縁ありや跛脚に仕やんせ歩行きや踊る様で面白いと云ふ餘計な面白味が御坐います殊又斯様お女だからとて雨蕭々を踊り都々一を謠ひ浩然の氣を養ふの具と爲す又足りませう而して斯様に改革すれば誰しも是れに沈溺し誤夢中又爲る者ありありますまい果して是れ沈溺せず誤夢中又爲る者なければ又家庫を棒又振り田畑を賣却する氣遣ひも御坐いますまい(ヒヤ)夫れ此の如くおれば藝妓も娼妓も其本意に叶ひ遊客も沈溺の憂ひを免かれ所謂一舉兩全の喜こび双方都合の宜い事で御坐います故お道人ハこの改革説を擔ぎ出し銳意天下をして之を履行せしめんと欲す世間もし傾國傾城の姿色と羞月閉花沈魚落鴈の美人を要する人あらば夫ハ別に其女のあるあれハ彼れに向つてこれを問ひ之を妾とするとも之を女房よあさるとも底ハ御勝手次第として決して藝娼妓又向つて兎や角と文句を附あくと宜ろしう御坐いませう是れ道人がこの改革説を擔ぎ

だした所以で御坐います(喝采)

○人を見て法を説け

上戸が下戸に向ッてお前の伊丹の酒の美味ことを知ッて居るかと問へば
下戸の答で自己ア知らさいと云ふは違ひない是れ下戸の酒を好まず之を
飲まさいからで御坐います又下戸が上戸に向ッて手前風月堂の羊羹の甘
味ことを知ッて居るかと問へば上戸の答へて自己ア知らさいと云ふは相
違ひない是れ上戸の菓子を好まず之を喰はさいあらで御坐います故に上戸
の上戸仲間が無ければ酔醒の水呑み話しが出来ず下戸の下戸友達で無け
れば花より團子の事柄を語らず而して其一方に偏倚し一向に好着するの
甚だ宜ろしく無い様で御坐いますが是れ人々の得手不得手で御坐います
から誠と據ころさい事で御坐います(ヒヤ) 學問上の事に於ても皆これ
と同じ事で御坐いまして例へば子の曰くの凝固り先生に向ッて横文字の
講釋を爲ても話し相手にあらず窮理學者に向ッて解剖や藥劑の理屈を述

ても話し友達もあらず醫者に向ッてロビンソンの數理を談し仕たからと
て面白く無からうし法律學者に向ッてマルツの簿記法を饒舌ツたからと
て感心なさいだらうし女郎も向ッて抑揚頓挫の文法を語るもお止さい
可笑くもさいと欠伸するだらうし藝者も向ッて二四不同の平仄を説も
あんですねへ堅くるしいと受附ないで御坐いませう夫れ斯の如く一方
於て一生懸命とあるも一方は於て或ひ其心に感せず或ひ何とも思
はず話し相手に爲らさいの何故かと云はゞ其談する所其の講釋する所
先方の意は適はず或ひ何だか分らさいからの事で即ち人を見て法を説
さいもゑで御坐います然るは世の中此人を見て法を説くと云ふ所も
お氣が附れさいで先方が讀めない人と云ふ事を百も承知して居りながら
無暗に六ヶ敷文字を集めて手紙を送り或ひ車夫馬丁の如き何れも知ら
さい者に向ッて無暗に屁痴固い漢語を遣ふ人あり是等傍に居て聞ても
誠に聞苦しいもので有りますれば宜ろしくこの人を見て法を説くと云ふ

古人の戒めも御注意あり度もので御坐います(喝采)

○アキラメル説

道人のお箱で又都々一を引合よ出す様で御坐います昔しの都々一に曰く「おもや濟おもや濟ます思やすむ知らぬ前だと思やすむ」トこの都々一を能く煮詰て見るときの即ちアキラメルと云ふ事は落入るで御坐いませう而して其アキラメルと云ふ事の如何ある摺梅敷のものかと云ふとフツツリ思ひ切ると云ふと同じ意味で例へば自家の山神の怠慢ものでお負よ亭主を尻に敷て困るから子供の爲にやア可愛さうだが此様おもものヲ持て居ちやア生涯自己の頭が擧らないエ、儘よ死んだとアキラメリやア濟で仕舞のら敲き出して仕舞へと一も二もあく思ひ切て追ひ出す是れアキラメの宜いので御坐いませう(ヒヤ〜)また虎れ子の様お金を横鼻輝に縛り附て置きしよ何時の間にか之を落して仕舞ひ百方搜索しても見當らぬ處からエ、仕方が無い是も厄落しだ泥坊に逢たと思つてアキラメるとフツ

ツリ思ひさる是れアキラメの宜いので御坐いませう又た深窓の函入娘がトト或る家の息子さんよ思ひを掛け寐ても覺ても目の前よ息子さんの姿がチヲ附ども口へ出して言ふよ恥かし去とて忘れて仕舞ふ事の出來すと云ふ處から彼の戀病ひとあるのれ是れアキラメの悪いので御坐いませう(ヒヤ〜)また自家の娘が今生て居ると幾歳にある彼の子が病中に新も仕たら宜のつたらうよと死だ子の歳を勘定して涙をこぼすの親の情とい云ひあがら是れも亦アキラメの悪いので御坐いませう然ればアキラメの宜いと悪いといひ只自分が腹の中の支配の仕様如何よあるので御坐います故よ酒が飲たいがマア一儲け儲けてから飲むと仕様とアキラメ餅が喰ひ度か今の錢が無いうらマア〜とアキラメ洋服が着て見たいがマア〜木綿の着物でも寒くさへ無けりやア宜とアキラメ西洋料理を喰ひ行度かマア〜今日香の物で茶漬と仕て置うとアキラメ煉瓦造りへ這入れバサア宜心持だらうがマア〜此家でも雨露の凌げるとアキラメ黒塗馬車で

エーイ〜と遣かせば随分悪い心持の仕ないだらうが金も悪い癖又其様
 事考へたッて駄目だからマア〜とアキラメ芳原へ浮れ込バ面白い
 よい違ひさいが女房子が可愛想だからマア〜とアキラメ彼の治郎おれ
 を馬鹿だと扱しやアがツた悪い奴だ一番彼奴の頭を張固繰て胸を晴さう
 かイヤ〜彼様お奴を相手に仕ちやア此方が笑はれるからマア〜とア
 キラメ彼の家主の禿頭爺め僅か計り店賃が延滞ツたからッて失敬事考
 かり云やアがる是から店賃を持って行て禿頭へ敲きつけて呉様かイヤ〜
 失敬事考を云はれるのも元を正せば此方が悪いのだからマア〜とアキ
 ラメ其他火事も災難とアキラメ泥坊も逢たも不運とアキラメ金の無いの
 の貧乏とアキラメ小言を云はれるの自分が悪いとアキラメ夏の暑いも
 のとアキラメ冬の寒いものとアキラメ遊山の年取てするものとアキラメ
 る如く何でも思ひ切様アキラメ様も困て何とも了簡の附もので御坐いま
 す(ヒヤ〜ノウ〜)併しおがら婦女子ならバ兎も角も立派ある二箇の罫

玉を所持する以上の彼れも駄目だからアキラメル是も無益だからアキラ
 メルと腹の中を些少し脳髓を縮めてアキラメて計り居ても餘り譽た譯で
 も有りませんら其處がソレ臨機應變で此奴ア何しても駄目だと思ふ事
 の早くアキラメをつけ此奴ア何か物に成りさうだと思ふ事ハアキラメお
 いで何處までも遣て見るが宜ろしう御坐います(大喝采)

○我頭の蠅を逐へ

コウ吉や其様お毎日〜酒ばかり喰ッて遊んで居ちやア仕方がねへち
 や無へか些たア女房の身にも爲つて見るが宜せ然して餓鬼やアこの寒い
 又單物一かんで震へて居るぢやアねへか可愛想にト意見すれば吉公のこ
 れを駁して曰く〜ん憚り様おがス見えても自己様の自己様の孔方兄で
 御酒を召上るンだ何も酒を飲からッて手前の處へ酒代の無心又行やア仕
 めへし手前も酔狂又人の頭の蠅より自分の頭の蠅を逐て居りやア澤山だ
 ト成やど右の意見をせし者も矢張り吉公と同格の者にして又常又吉公と

同様ある怠慢者あらば縦ひ吉公の行爲が悪いませよ片相手の意見が宜に
 せよ吉公の受附ずして却つて之を劍突を喰はせるの尤も千万の事で御坐
 います(ヒヤ)然るは是と反して此吉公より一層身分の上位にして且ッ
 品行方正の人が懇み意見すれば如何に亂暴者吉公ありとて其改心するや
 否やの扱置き如何も御尤も様へイと頭を下て平伏し劍突のケの字
 も口へ出さいで御坐いませう是れ何故又吉公が平伏するかと云ふに其意
 見する人の身に一點の打處もかく我悪き處に自ら氣がつき其意見を尤
 もと思ふからで御坐います(ヒヤ)故又古人も人を正さんと欲すれば先
 づ已れを正せと云ひました是を言葉を換て云ふと即ち人の頭の蠅を逐に
 の先づ自分の頭の蠅を逐て掛れと云ふも同じ事で御坐います然るに世間
 の中に自分の頭の蠅と打捨てておいて唯人の頭の蠅を逐ひたがる事恰も
 前の吉公又劍突を喰はされた男と同様ある人がイッテも御坐います今こ
 れを一ッのお話しし纏て見ると彼のお醫者さんで御座います元來このお

醫者さんと申す者の衛生の本来本元で御座いますから身体を養生する事
 の自分が先立立てこれを仕て見せなければ人が不安心に思ふ處へ醫者の
 不養生と云ふ謗又漏す自分の毎晩寐酒の五合ツ、も飲んで居る癖又人に
 向つての酒の身体に大害を醸すものだからお廢止ささいと云ひ自分のノ
 ベツ又パツリ、煙草を喫して居ながら人又向つての煙草の身体又大毒
 だからお廢止ささいと云ふ様お事あらば之を聞く人々が成やど御尤も然
 らば先生の御説諭又隨つて早速又禁酒致しませう煙草も今日限り廢止ま
 せうと平伏致しませうか決して此醫者の説諭での平伏が出来かねるで御
 坐いませう(ヒヤ)然れば他人の目上に立ち人の頭の蠅を逐ひ人を支配
 せんとする者の先づ自分の頭の蠅を逐ひ然る後に他人の頭の蠅を逐様よ
 仕なければ折角の意見も却て何の役にも立ちませんチット道人も人様の
 頭の上より自分の頭の蠅を逐ひませう(大喝采)

○舊慣を捨て兒童を教育せよ

思ひ回せば已に廿年以前の事で御坐いますが彼の金紋先箱で下は居ロ
 の威權赫々堂々として天地を轟かし飛鳥を落すの封建時代の人種を士農
 工商に區別し士と農工商の懸隔の著るしき等差が御坐いまして士の農工
 商を視ること恰かも蛆虫の如く農工商の士族を恐れること恰かも蛙の蛇
 に於るが如くで御坐いしました故に士族の益々權を振て跋扈し農工商のま
 すく身を縮めて怖恐し往來を歩行も自分の身体でありながら自分の
 身体の心地せず所謂戦々兢兢として薄氷の上を行の思ひをし居りまし
 た(ヒヤ)殊に學問の如きの政府の關係するの唯士族をかりを獎勵する
 規則で御坐いまして他の三民のこれを度外に於て問はず甚しきに至つて
 の四書五經を講讀するをも禁せらるゝ等の制度が御坐いしましたら農工
 商も生れた子弟の縦ひ如何ある志ざしがあつても講讀する事が出来ず偶
 偶これを講讀するものあるも恰も芝居の悪漢が密書を竊讀するの有様
 よて又これを見聞する知己朋友も農商に無益ある學問を爲るとして無暗に

疎する有様で御坐いました故に士族の公立またの私立の學校も這入つて
 古今興廢の事蹟を講究し剩さへその抜群あるもの政府から學資金を與
 へて聖堂に出さしむるなどの仕合せを得る事がありまして他の三民の
 之と反對して僅か又寺子屋に這入つて實語教童子教から名頭づくし商賣
 往來庭訓往來古狀ぞろひ位を稽古して足れりとするの不幸に悲んで居り
 ましたが其時代の各自又交際する所のものが皆この不幸に遭遇して居
 るががらも彼我の力が平均して居りますも唯日用の贈答文と營業上と關
 する送り状うけとり証などを曲りあり又書さへすれば夫で差支へのない
 有様で御坐いしました(ヒヤ)然るも明治維新とありまして右の如
 き馬鹿しき教育法のサツパリお止めな爲つて百姓でも町人でも男で
 も女でも學問して利功にありさへすれば大威張りも張威つて馬車も乗て
 歩行うと馬も乗てとび歩行うと勝手次第に成りましたの所謂文明のお
 蔭で御座います左すれば自分の腕次第で何様も出世も出來又息子が出

世すれば其親達も左り團扇の氣樂が出来るの今更道人の申すまでいも御座いませんが兎角に農工商の人達の昔の習慣が腹の中に染こんで居て百姓の學問迄あつても宜いものだ商人に學問に入らぬことだと云つて子供の學問に餘り身を入れたい人が御座います但し困つた次第で御座いませんか(ヒヤ)斯く説來らば諸君の中あるひに云はれん道人より少しく眼玉を開いて社會の有様を見よ當時の文明の歩を進め齒抜の老爺さんも齒ぐきで牛を喰ひ念佛の婆さんも寫真をとる世の中は其様を舊弊の夢を見て居るもの恐らく一人もあいらら成程諸君の仰せの通り斯様を一人一人も無い様に見ゆれども是の上邊の事で其實を云へば中等以下の人の大抵道人の眼鏡が外れたい積りで御座います其証據は少しく頭を擧て小理屈を並べ人の風上は立人を尋ねれば十中の八九は何れ縣の士族と肩書の附て居る人で御座います(ヒヤ)尤も中より左様をかりも云へあ人もありますれども何れ致せ未だ士農工商ともに平均すると云ふ事の

容易は出来ぬ様に考へます左すればパイッラ齒抜の老爺さんが齒ぐきで牛を喰ふもせよ念佛の婆さんが寫真をとるにもせよ夫れで開化だ文明だど申す譯でも有りませぬし殊もまた我子を教育して立派に仕立あげ様と思ふ了簡があらば何ぞ區役所から學校へ出せ學校へ出せと催促されて澁々小學讀本と石盤を買様な事もありますませぬサア斯様云つて見ると何しても未だ文明の有難味が本統は腹の中まで感じたいに違ひない若しそれ文明の味が本統は腹の中へ感じたいとすれば畜子子供の不幸も舊幕の時に異ならざるのみならず第一親の義務が濟すまゝ國へ對する義務が立ぬ譯で御座いますから人の父兄たる人々の彼の舊弊の窮屈を脱し今の四民の同權として腕くらべ力くらべと云ふ所は注意して子供を教育するが肝要で御座いませう(大喝采)

拍手續滑稽獨演說終

明治二十年十月十八日版權免許
同年十一月出版

正價金五拾錢

東京府平民

編輯兼出版人

千葉茂三郎

京橋區銀坐貳丁目六番地

京橋區銀坐貳丁目六番地

發兌所

共隆社

大賣所	日本橋區橫山町三丁目	辻岡文助
同	本石町二丁目	上田屋榮三郎
同	通四丁目	春陽堂
同	橋町四丁目	鶴聲社
同	藥研堀町	鈴木喜右衛門
同	馬喰町貳丁目	山口屋藤兵衛
同	京橋區南鍋町一丁目	兎屋書籍店

稗史小説出版書目

三木愛花仙史校閱并序

○名將遠征奇緣

洋裝美本全壹冊 (版權免許)
正價金貳拾錢

一名西洋水滸傳

此書ハ日本の豊臣佛國の郡翁と并峙する一英雄が卑賤より崛起して中央亞細亞を席卷し終に覇業を開きたる一代の戦記として以て近年世論の喧しき中央亞細亞の大局を知るべきなり而して其間壯士の志と重なるあり名族の義に依るあり名士佳人の離別を重なるあり忽にして悲壯慷慨忽として流麗婉轉讀で悉の了るを覺えざるの稗史なり

三木愛花仙史原著 中村柳塢編述

○芳春佳話百花魁

洋裝美本全壹冊 (版權免許)
正價金五拾錢

政海の波文苑の叢以て經となし風流都雅人情婉轉以て緯となし其間美人長樂の未央を恨み才子時事の變動に感じ濕上お花媚ひ東台に鶯歌ひ畫橋の佳會青樓の琴心東都の佳話大坂の奇獄忽哀情切々忽感慨勃々既として風雅慕ふべく奇想驚く可く一讀手を離すに堪へざるの書是を樂て夫れ復他に無かるべし

瘦々亭骨皮道人演説 和良井鋤太筆記

○拍手滑稽獨演説

洋裝美本全壹冊 (版權免許)

演題目次○金の有と無との執れか宜平○天鉄羅の説○日常の説○道樂の説○油斷の説○奪

はるゝ説○酒の利害を論ず○儘ふならぬ浮世○月と監との説○競争の説○細君に一言す○

益裁の改良を望む○詰りぞうする乎○狹帯會○丁稚小僧に忠告す○娼妓に現を扱すの野暮

なり○鶏と孔雀とは孰れか優る○雪中の感○自負の説○居い先生望む處あり○似て非な

るものゝ説○事の輕忽に處すべからず○日用の往復文の簡短にして解し易きを要す○十把

一からげ○馬鹿か利功か○情死の廢止にすべし○注意の平均にお頼ま申す○占の頓智なる

説○歳晚の説○恐るべき説○重言競言葉のわけ足

○世に獨り相撲と云ふものありて。獨で敵と味方を兼ね。自分免許の大關氣取。四十八手の

裏表。貫抜かわが脊負あげに。八化ヨイヤの行司なく。何方が負ても我獨り。轉々々と笑ひせ

る。滑稽踊の土俵より。土俵圖もあひ法螺ふきを。思ひ出せし演説の。始終發戯の新工夫。口

から出まかせ芽茶苦茶に。味附と糞とを混淆て。瓢箪。鯨の戯浮戯体。腹をるるぐりしお饒舌

の。贊成ある敷不同意敷。底の如何か知れぬ。笑ふ門に。福來る。笑て損した者ない。泣

泣て。澁々暮すより。笑つて暮すが命の洗濯されば獨りで苦世々々と物案にする窮屈を。儘の

川へとツン流し。オヤ面白み子へ。オヤ可笑い子へ。諸君よく御覽われ

三木愛花仙史校閱并序 八重の屋主人著

○紅涙 薔薇の花影

洋裝繪入美本全壹冊 正 價 金 五 拾 錢

西洋小説の脚色妙なるも譯する者拙きを苦み日本小説巧みなるも脚色の劣るを惜み今茲

は脚色を西洋の妙なるものより擇び事實文章を日本の巧手よ成す故に編中の人才子義も富

んで然も輕薄ならず佳人情濃かよして然も節操を重んず恩仇相纏ひ因果互に應ず幻中

の真、奇中の正、蓋し意想天外より落るの傑作なり

○佛國セルバント氏著○三木愛花仙史閣○齋藤良恭譯

○新話谷間乃鶯 洋裝密書入全一冊 (版權免許) 正 價 金 五 拾 錢

此書は西班牙國の一名族の子弟と一紳士の處女とが冥々の戀たるを知らずして血縁を通じ
思戀纏綿一離一合斷腸すべく悲憤すべく哀痛とべきを骨子として編成し其間お羅馬の懷古
は離黍の涙を洒ぎ月湖の奇偶に百年の縁を了し變幻出沒の新小説にして佛國巴里に於て紙
價を貴からしめたる文章流暢趣向優美の原書を婉轉自在の筆を以て翻譯したる稗史なれ
ば幸よ看官一讀して其奇書たるを知り給へ

三木愛花仙史閣 中村柳塢纂譯

○自由 旗風 華 盛 頓 勳 功 記

洋裝美本密書入 全一冊正價金六拾五錢 (版權免許)

米國の獨立戦争の世界未曾有の事なり然れども譯本皆正史跡なれば其事實却て傳へらる此書ハコロンブスが亞米利加發見の話歐洲各國より殖民の次第に始り七年間七十餘度の獨立戦争に華盛頓將軍が一代の譽を顯へす實傳を演義釋史跡に綴りたる勇壯流暢の軍記よて我邦よ於て西洋正史を演義譯したるの鼻祖なれば一讀して愉快の中に浩益を得べし

愛柳痴史校閱并序 浮世粹史著

○一讀 明 治 浮 世 風 呂 正 價 金 五 拾 錢 (版權免許)

一名 命の洗濯

酸も辛も丸呑みの。浮世粹史の戯れに。筆を執られし此書ハ。三馬翁の名を借れど。昔しハ昔し今ハ今。時代替れば人情も。打て替つた文明開化。其の開化をバ種として。滑稽洒落の新趣向。面白かかしき味ハ。是ぞ浮世の早取寫真。人の癖見て我癖なはず。ヒヨンな處の功能ハ。嘘か真か論より証據。御覽の上で御評判を乞ふ

梓屋仙史閣○風月散史著

○十人 婦 人 氣 質 洋裝繪入美本全一冊 (版權免許)

天下の樂ハ婦人なり然れども世人の身を誤るも多クハ婦人よ因る愛すべきハ婦人なり怖るべきハ婦人なり其婦人の穴を穿ちよ穿つて奥様。權妻。山神。地獄。女房。娘。藝妓。娼妓。後家おさん十人十色の手練手管魂丹内幕を筆頭の淨玻璃鏡寫せし古今無双の穴探し御婦人方よハ御氣の毒さ殿方よハ至極面白き無比の珍書なり

松の家みどり著

○日米 櫻 と 薔 薇 洋綴繪入全壹冊 正價金五拾錢

此書ハ米國の才子日本の佳人意氣投合結婚と約せるも一朝國を隔て屢々厄難に遭遇し商業の浮沈奇禍の幽獄親友の情誼佞人の戀慕義侠の幫助兄妹の奇遇益出て益奇よ遂に忍耐節操を全ふし薔薇娼婦櫻花爛熳時を得るものよして其間政治教育風流人情具よ寫し一回緋どけハ他事を忘るとよ至る近來の一奇書あり

愛々堂主人序 笑々居士輯録

○新題 雅樂多草誌

洋装繪入美本全一冊 正價金五拾錢 (版權免許)

上戸が旨いと云へば下戸の旨くないと云ひ男が面白いと云へば女の面白くないと云ひ兎角は難た艱だと釣合の取悪い者なれど此書とそんな窮屈をサツパリ改良し殿方でも御婦人でも御年寄でも子供衆でも何方様が御覽よ成ても至極面白をかしくッて御爲よなること云ふ八方睨みの珍書なり

佛國セルバント氏原著○愛花仙史閑○中村柳塢譯

○歐洲美人の良

洋装密書入全一冊 正價金五拾錢 (版權免許)

此原書ハ文章の流暢優美を以て歐洲ハ名高ク其諸國ハ翻譯して傳へるもの數十版あり卷中一美人の困苦一姦婦の毒計一義僕の實意一武官の經歷を骨子として編成し變幻出沒巧みハ意想外の趣向を出せし譯文亦流暢優美を旨としたれば毫も原書の妙を損せざるなり一讀の上其妙を知り給へ

三木愛花仙史閑○田中清風著

○波瀾官員氣質

洋装繪入全一冊 正價金五拾錢 (版權免許)

此書ハ才子美人の離合集散を本として官員社會の内情を寫出すと上等官より等外に到るまで拂髻折腰の工合休日の様樣昇衙退省の様子地震の騷動等其身其中に在りて其事を見る如く其間に古名士今奇人の義聞勇談を挿入し悲壯涙を拂ひしむるあり凛冽髮冠を突かしむるあり況又美人の風情才子の艶聞を記したる十九世紀官海の寫眞鏡とも云べき珍書あり

松木風峰著

○政治芳園之嫩芽

洋装繪入美本全壹冊 正價金五拾錢

此書ハ政治上の主義より一家の間ハ三黨を出し才子佳人各其主義ハ因て運動するの景況を寫し兼て愛蘭の形勢ハ移り其間慷慨悲壯義氣凜烈情緒纏綿風趣高尚敬すべく慕ふべく怒るべく哀むべく離合聚散幾多の星霜を経過し初めて其目的を達するよ至るものなり此を一讀せば愉快々の中ハ益する所多かるべし

215R90

電 雲 散 士 著

○ 獨 立 東 洋 開 化 の 魁

洋裝繪入美本全壹冊
正 價 金 五 拾 錢

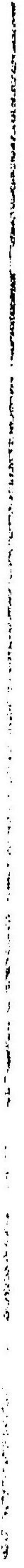
此書ハ才子佳人の興業を述べ冥々の中ニ富國強兵の術を講じたるものにして能く細勤を
誣しむ者ハ大事を就し自づから驕傲なる者ハ遂に能く成るなきの理を示し文章の流暢
趣向の微妙ハ措いて問はず讀者をして開卷一讀奇と云ひ妙と稱し自づから慷慨の氣を養
生せしむるの一大珍書なり幸よ看官の愛覽を乞ふ

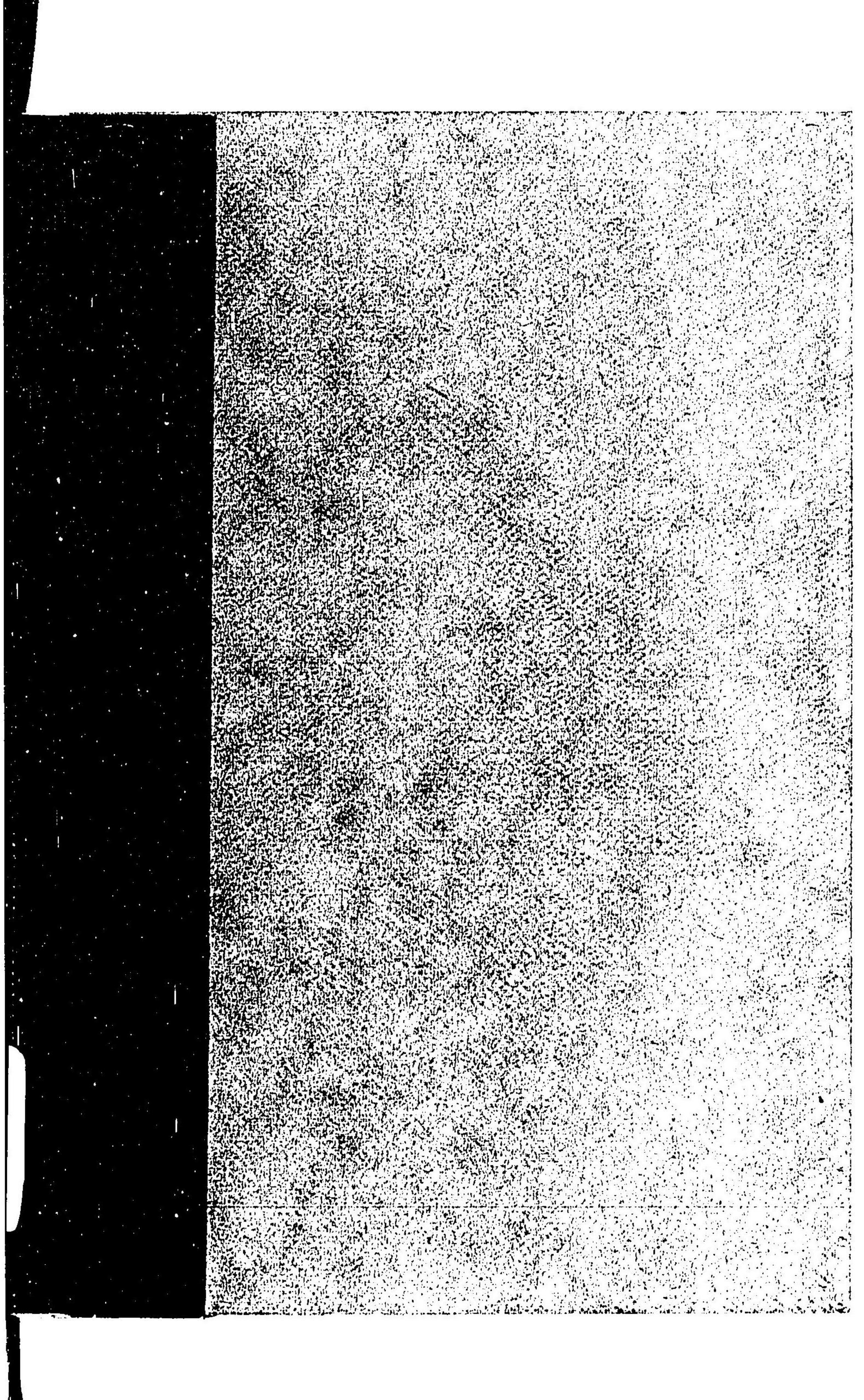
浦の家霞閣 竹軒居士編

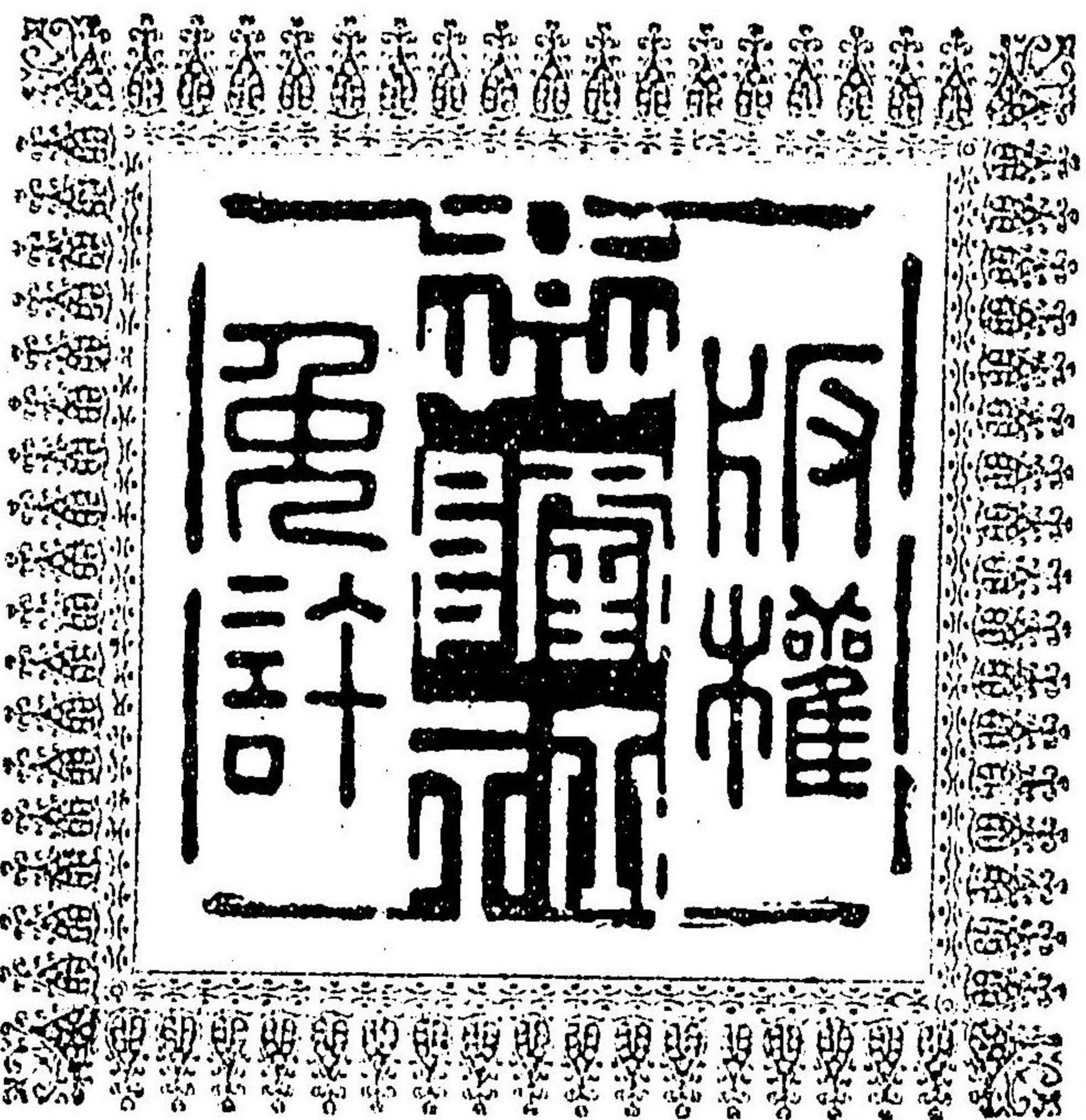
○ 歐 洲 珍 事 の は き よ せ

洋裝繪入美本全壹冊
正 價 金 五 拾 錢

此書ハ世界ノ名を轟かしたる豪賊カルトーシが神出鬼没の伎倆を顯したる事實○可憐
の女丈夫と呼ばれたるシャルロターが苦心の後志望を達したる状態○慷慨悲憤の活劇を演
したるフェリークスの顛末○毒婦マリーが情人を熱愛したるが爲め本夫を毒殺したる事







一五
一五
一五